令和2年度（2020年度）
鞠智城跡座談会

地域社会からさぐる
古代山城・鞠智城

日時　令和 2 年 11 月 22 日（日）

場所　鞠智城研修施設収録

主催　熊本県・熊本県教育委員会
明治大学国際日本古代学研究クラスター

後援　山鹿市教育委員会
菊池市教育委員会
熊本県文化財保護協会
菊池川流域古代文化研究会

令和2年(2020年)「鞠智城座談会」

古代山城及び鞠智城跡の認知度の向上と学問的進化を目的に実施する。

「地域社会からさぐる古代山城・鞠智城」をテーマに、新型コロナウィルス感染症感染拡大防止のため「三密」(会場に大勢の観客に集まっていただく)を避ける形式で実施する。

小人数による鞠智城座談会「地域社会からさぐる古代山城・鞠智城」を実施し、その映像をユーチューブ等で公開する。また、報告のレジュメと、座談会の記録を、熊本県教育委員会が冊子として刊行し、ホームページにもそのデータを公開する。

1　テーマ　鞠智城座談会「地域社会からさぐる古代山城・鞠智城」
2　日　時　令和２年（2020 年）11 月 22 日（日）　14:00 ～ 16:40
3　場　所　鞠智城研修施設（録画・録音できる会議室。コロナ対策の間隔維持）
4　主　催　熊本県・熊本県教育委員会、明治大学国際日本古代学研究クラスター
5　参加者　座談会は報告者４名・コーディネーター・座談会のみ参加者計６名。
6　周知方法
（1）座談会前に座談会のテーマに関する報告のレジュメ作成・配付。（ホームページにも事前に公開）
（2）録画してユーチューブ等で画像を公開し、ホームページにレジュメデータを公開。
（3）座談会後に熊本県教育委員会で文章を起こした冊子を刊行し関係機関（者）に配付、ホームページにも公開
7　日　程
（事前協議　12:30 ～）
14:00 ～挨　拶　　村﨑孝宏（熊本県立装飾古墳館長）
14:10 ～座談会主旨　佐藤信（東京大学名誉教授）
第１部　報告要旨発表
14:20 ～ 15:00
14:20 ～報告要旨①　吉村武彦（明治大学名誉教授）「鞠智城と地域社会」
14:30 ～報告要旨②　亀田　修一（岡山理科大学教授）「古代山城と地域社会」
14:40 ～報告要旨③　溝口優樹（中京大学講師）　「古代肥後の地方豪族と鞠智城」
14:50 ～報告要旨④　亀田学 (温故創生館)「鞠智城と菊池川流域の古墳時代･古代遺跡」
（小休憩　10 分）
第２部　座談会（司会・コーディネーター　佐藤信（東京大学名誉教授））
15:10 ～ 16:40　　発表者及び村﨑孝宏の参加
15:10 ～Ⅰ　考古学からみた古代山城・鞠智城と地域社会
15:40 ～Ⅱ　古代史からみた古代山城・鞠智城と地域社会
16:10 ～Ⅲ　鞠智城と肥後の地域社会
16:40　閉会

鞠智城と地域社会 ―「辺要」としての地域のなかで

吉 村 武 彦（明治大学名誉教授）

はじめに

a 大宰府・鞠智城の問題を、律令制国家の辺要政策との関係で捉えたい。列島古代の辺要政策とは、蕃国･夷狄に対する対応策であるが、蕃国は朝鮮半島と中国大陸、夷狄は東北の蝦夷と、九州南部の隼人である。蝦夷と隼人では、質的差違がある。

b 白村江の敗戦により大宰府・鞠智城は、古代（朝鮮式）山城や防人など唐・新羅に対する新たな国防体制（西日本防衛ラインと呼ぶ）に取り組まざるをえなかった。そのため二重構造の辺要対策にならざるをえなかった。

c 大宝令施行後、古代山城は唐・新羅との外交関係が改善されると、西日本防衛ラインは廃止されるようになったが、大野城・基肄城と鞠智城は、大宰府によって維持された（～ 10 世紀初）。しかし、律令制国家の隼人に対する夷狄政策が変化したため、特に鞠智城の役割に影響がでたと思われる。

d このような辺要政策の変遷のなかで、地域社会がどのように変わっていったのか問題となる。しかし、文字史料はほとんどなく考古学研究の成果に待たなければならない。

e 小論の構成は、次のとおりである。

一 律令制国家の辺要政策 ― 律令法の辺要と「辺要」

二 筑紫（西海道）の辺要政策と古代山城

三 肥後国と鞠智城

一　律令制国家の辺要政策 ― 律令法の辺要と「辺要」

(1) 律令法の辺要

1. 養老令の辺要政策

a 仮寧令官人遠任条に「辺要」の語句

＊『令集解』古記に「及任居辺要。謂伊伎・対島・陸奥・出羽是」

b 大宝令制下では、九州の伊伎（壱岐）・対島（対馬）と、東北の陸奥・出羽国

＊九州 ― 壱岐・対馬　　対半島・大陸策

＊東北 ― 陸奥・出羽国　　対蝦夷策

2. 蕃国・夷狄政策

a 職員令大国条（養老令）

＊陸奥、出羽（712 建国）、越後

・「饗給、征討、斥候（せっこう）」

＊壱岐、対馬、日向、薩摩（702 年建国）、大隅（713 年日向から分置）

・「鎮捍（ちんかん）、防守、蕃客、帰化」
・日向・薩摩・大隅は、対隼人策の国
＊大宝令では、壱岐・対馬と日向か
b 大宰府・筑紫関係
＊職員令大宰府（養老令）
・「烽候、蕃客・帰化・饗讌事」
・大工、少工「城隍、諸営作事」　［匠司］
・防人正、佑、令史「防人名帳」　［防人司」
c 軍防令縁辺諸郡人居条（東辺条）
＊凡縁東辺北辺西辺諸郡人居。皆於城堡之内安置。其営田之所。唯置庄舎至農時堪営作者。出就庄田収斂訖勒還。其城堡崩頽者。役当処居戸随閑修理。
・東辺（東海、東山道）、北辺（北陸道）－ 蝦夷に接する地域
・西辺（西海道）－ 隼人に接する地域（日本思想大系『律令』）
＊城隍条の「城」とは異なる（蕃国対応）
d 衛禁律越垣及城条、賊盗律盗節刀条
＊筑紫城
＊陸奥・越後・出羽等の柵（東北の城柵官衙）
e 隼人司
＊職員令隼人司条
・隼人司　正一人。〈掌。検校隼人。及名帳。教習歌□。造作竹笠事〉佑一人。令史一人。使部十人。直丁一人。隼人。

3. 辺要地の城柵
a 筑紫城と東北柵
＊名称の差違
・城（筑紫城）と柵（東北柵）
＊支配の相違
・東北は「国司分担統治政策」と呼ばれるようなシステム
b 筑紫城
＊「大野・基肄・鞠智城等をさすか」（日本思想大系『律令』）

（2）大宰府と辺要政策
1. 大宰府は、『続日本紀』等では「辺要」として扱われている。
a『続日本紀』
＊天平８年（736）５月丙申条
・「大宰管内諸国已蒙処分訖。但府官人者。任在辺要禄同京官」
＊天平宝字５年（761）７月甲申条
・「今西海諸国。不造年料器仗。既曰辺要。当備不虞」
＊法律用語の辺要との関係で、「辺要」（カッコ付き用語）として扱う。

b その後の大宰府

＊宝亀 11 年（780） 7 月条

・勅曰。筑紫大宰僻居西海。諸蕃朝貢舟楫相望。由是簡練士馬。精鋭甲兵。以示威武。以備非常。（略）

＊宝亀 11 年 8 月条

・太政官奏曰。筑紫大宰。遠居辺要。常警不虞。兼待蕃客。所有執掌。殊異諸道。（略）

2. 西海道諸国への辺要策

a 筑紫城（衛禁律越垣及城条、賊盗律盗節刀条）

＊「筑紫」は広義の筑紫

＊大野・基肄・鞠智城は含まれる

・筑後国の大野城

・肥前国の基肄城

・肥後国の鞠智城

b 三野城・稲積城の所在地

＊文武 3 年（699）12 月条「令大宰府修三野・稲積二城」

・大宰府の関与と対隼人策

・三野城 － 日向国児湯郡三納郷か

・稲積城 － 大隅国桑原郡稲積郷（当時は日向国）

c『日本書紀』景行天皇の熊襲征討

＊豊前・長峡（ながお）⇒ 碩田（おおきた）⇒ 日向 ⇒ 熊襲征討（襲国平定）
⇒ 子湯県

＊［筑紫巡狩］夷守 ⇒ 熊県 ⇒ 葦北小島 ⇒ 八代県豊村 ⇒ 高来県 ⇒
玉杵名邑 ⇒ 阿蘇 ⇒ 筑後御木（みけ）⇒ 八女県 ⇒ 的邑 ⇒ 日向（帰）

＊『書紀』伝承では、日向側が熊襲の拠点。

3. 対隼人政策 － 薩摩・大隅の建国と支配体制

a 薩摩国の建国と「柵」

＊大宝 2 年（702）10 月条

・先是、征薩摩隼人時、祷祈大宰所部神九処、実頼神威、遂平荒賊。爰奉幣帛、以賽其祷焉。唱更国司等〈今薩摩国也〉言。<u>於国内要害之地建柵置戍守之</u>。許焉。

＊「国内の要害の地に柵を建てて、戍を置きて（兵士を駐在させて）守らむ」
〈注〉唱更国司は、辺戍を守る国司の意。

b 大隅国の建国

＊和銅 6 年 4 月条

・割日向国肝坏・贈於・大隅・姶羅四郡、始置大隅国。

c 薩摩・大隅支配の特徴

＊薩摩国の「隼人郡」（郷数が少ない）の存在

＊薩摩・大隅国への班田制

・延暦 19 年（800）12 月　班田制の施行

二　筑紫（西海道）の辺要政策と古代山城

（1）大宰府以前の官司・官人

1．那津官家

a 宣化元年 5 月条

＊詔曰、（略）夫筑紫国者、遐邇之所朝屆、去来之所関門。是以、海表之国、候海水以来賓、望天雲而奉貢。

b 那津官家に、河内茨田屯倉・尾張屯倉・新家屯倉・伊賀屯倉の穀を運ぶ。

＊那津官家に諸国の屯倉から穀を支援する体制

2．筑紫大宰

a 推古 17 年（609）4 月条

＊筑紫大宰奏上言、百済僧道欣・惠彌為首、一十人、俗七十五人、泊于肥後国葦北津。（略）

b 筑紫大宰は、推古朝に設置されたか

3．筑紫・吉備・周防・伊予の総領（大宰）

a 総領派遣と西日本の山城

＊筑紫

＊周防（長門を管轄）　長門城、（石城山）

＊吉備（播磨を管轄）茨城、常城、（鬼ノ城、大廻小廻、城山）

＊伊予（讃岐を管轄）　屋島城、（永納山、城山）

（2）大宰府

1．大宰府と防人司

a 防司（防人司）

＊ 職員令大宰府条

・防人　正 1 人。〈掌。防人名帳。戎具。教閲。及食料田事〉

・　　佑 1 人。〈掌同正〉

・　　令史 1 人

＊考課令最条

・防司（大宝令も）

b 防人司

＊『続日本紀』天平宝字元年閏 8 月壬申条

2. 防人の歴史

a『日本書紀』の防人

① 大化２年　改新詔

② 天智３年是歳条

＊於対馬島・壱岐島・筑紫国等、置防与烽。又於筑紫、築大堤貯水。名曰水城。

③ 天智 10 年 11 月条

＊唐国使人郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、總合二千人、（略）忽然到彼、恐彼防人。

④ 天武 14 年 12 月条

＊遣筑紫防人等、飄蕩海中、皆失衣裳。則為防人衣服

⑤ 持統３年２月条

＊詔、筑紫防人、満年限者替

※ 白村江の敗戦以降に防人が設けられる

※ 軍防令兵士上番条は「向防三年」（交替制）

b 軍防令

＊軍団・兵士・防人・城柵・烽など辺要策に密接に関係

c ８世紀における防人制の変遷

＊ ⇒【防人年表】

＊８世紀になると、必ずしも東国防人が常駐したとはかぎらない。

3. 兵士と防人

a 西海道の兵士制

＊西海道は、８世紀（養老３年〈719〉以降）における兵士の停廃政策の適用外地域

b 防人停止時における西海道の兵士動員

＊天平宝字元年（757）閏８月条　　７国　日向国を含む

＊天平神護２年（766）４月条　　６国　日向国を除くか

（3）筑紫の対隼人政策

1. 大宝令制定以前（天智～持統朝）の隼人に対峙する国

a 隼人への対峙国

＊九州島東側 － 日向国

＊九州島西側 － 肥後国

b 薩摩建国と肥後

＊薩摩国高城郡は、肥後国からの移住政策の郡

・合志、飽田、宇土、託万郷（４／６）

2.「隼人」認識の変化

a 和銅３年（710）まで

＊蝦夷・隼人は同列扱い

b 和銅３年～養老元年（717）

＊隼人に対する夷狄観の変化（永山修一説）

＊西海道における隼人政策の変化

・文献史料では確認ができない

（4）古代山城築城の技術的基礎

1．前方後円墳、横穴式石室

a 西海道・肥後における古墳築造技術

＊筑後　　石人山古墳、岩戸山古墳

＊豊前　　五所山古墳

＊肥前　　船塚古墳

＊肥後　　長目塚古墳、江田船山古墳

＊日向　　男狭穂塚、女狭穂塚

b 菊鹿盆地の古墳時代後期の主要古墳（『鞠智城 Ⅱ』）

＊盆地西部

・チブサン古墳、中村双子塚古墳、オブサン古墳（円墳）

＊後期後半は盆地東部に築造

・袈裟尾高塚古墳（円墳）

＊木柑子フタツカサン古墳、木柑子高塚古墳

2．首長居館（豪族居館）

a 豪族居館

＊筑後国御原郡（現小郡市）　上岩田遺跡

b 国造の居館

＊肥後地域の国造

・火国造、阿蘇国造、葦分国造、天草国造

＊国造居館は不明

（5）律令制における山城関連の維持策

1．城関係の維持（『令集解』賦役令雑徭条「古記」〈大宝令の注釈書〉）

a 軍防令

① 軍団置鼓条　（倉庫の修理）

軍団（略）倉庫損壊。須修理者。十月以後聴役兵士。

② 城隍条　（城隍〈堀〉の修理）

城隍崩頽者。役兵士修理。若兵士少及无者。聴役人夫。所役人夫。皆不得過十日。

③ 蕃使出入条　（蕃使の出入の際の防援）

蕃使出入。伝送囚徒及軍物。須人防援者。皆量差所在兵士逓送。

④ 縁辺諸郡人居条　（辺境諸郡の城堡の修理）

其城堡崩頽者。役当処居戸。随閑修理。

b 営繕令

① 貯庫器仗条

貯庫器仗。有生渋綻断者。三年一度修理。在外者。役当処兵士及防人。

② 津橋道路条

津橋道路。毎年起九月半。当界修理。十月使訖。其要路陥壊停水。交廃行旅拘時月。量差人夫修理。非当司能弁者申請。

c 補亡令

① 有盗賊条

有盗賊。（略）率随近兵士及夫。（略）登共追捕（略）

※ 皆此令条之内。不在雑徭之限

三　肥後国と鞠智城

(1) 律令以前の肥後

1. ヤマト王権と肥後

a 江田船山古墳出土の銀錯銘大刀　［5世紀後半］

＊「治天下獲□□□鹵大王世奉事典曹人名无利弖八月中用大鉄釜并四尺廷刀八十練九十振三寸上好刊刀服此刀者長寿子孫洋々得□恩也不失其所統作刀者名伊太和書者張安也」

＊獲加多支鹵大王（雄略天皇）世に「典曹人」として、ヤマト王権に出仕

・埼玉・稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣　「杖刀人首」

b『書紀』敏達 12 年（583）是歳条　［6世紀後半］

＊（日羅）進退跪拜、歎恨而曰、「於桧隈宮御寓天皇之世、我君大伴金村大連、奉為国家、使於海表、火葦北国造刑部靫部阿利斯登之子、臣達率日羅（略）」

＊火葦北国造刑部靫部阿利斯登之子

・宣化朝、我君大伴金村大連、臣達率（百済）日羅

2. 肥後国の氏・部民

a 主要な氏・部民

玉名郡　日置部、日置部公、*蘇我部*

山鹿郡

菊池郡　大伴部、（秦人）

阿蘇郡　阿蘇君、鳥取

合志郡　<u>壬生部</u>、日下部、鳥取　　［合志評か］

山本郡

飽田郡 建部公（君）、春日部、私部

託麻郡

益城郡 山部、大伴君、宅部

宇土郡 額田部君

八代郡　高分部

天草郡

葦北郡 山部、刑部、日奉部、家部、他田部、真髪部（白髪部）、大伴部

球磨郡　久米部

※ イタリック体は郷名より推定

3. 特徴

a 名代・子代の設置時期　［顕宗以前は、部民制は存在せず。仮託］

＊允恭　刑部（允恭妃の名代・子代）

清寧　白髪部

顕宗　久米部（幼年期の名代・子代か）

安閑　春日部（安閑妃の名代・子代）

敏達　他田部

b 私部、壬生部、日奉部の設置

＊ 577　敏達 6　私部、日奉（日祀）部の設置

607　推古 15　壬生部の設置

＊部民の再編期に設置

・王権との関わり

c 建部

＊西海道の建部

・筑前、肥後、日向、薩摩

(2) 肥後国と菊池郡

1. 肥後国の兵士と軍団

a 兵士

＊『類聚三代格』弘仁 4 年（813）8 月 9 日太政官符

・兵士 4000 人 ⇒ 2000 人　4 軍団（団別 500 人）

＊『平城宮木簡』六「解説」

・1 軍団は、200 ～ 400 人程度

b 軍団

＊ 4 軍団

・『類聚三代格』弘仁 4 年（813）8 月 9 日太政官符

＊益城軍団

・「肥後国第三益城軍団養老七年兵士歴名帳」（平城宮木簡 9884）

2．肥後国菊池郡の特徴

a 郡家と郡名寺院

＊西寺遺跡（郡家か）

＊十蓮寺跡（郡名寺院か）

b 藤原光明子との関係（東大寺出土木簡）

＊菊池郡子養郷人　大伴部鳥上・稲依が施薬院で仕奉。東大寺大仏建造と関係。

・皇后宮職の封戸か。施薬院は天平２年（730）設置

（3）鞠智城の特徴と役割

1．所在地と特徴

a 所在地

＊肥後国菊池郡城野里（郷）

＊菊池郡の郷

・城野、水島、辛家、夜開、子養、山門、上甘、曰理、柏原

b 鞠智城と大野城・基肄城

＊大野城と基肄城は、大宰府外郭線で結ばれている。

＊鞠智城は、大野城・基肄城とは性格が異なる。

2．鞠智城の特徴

a 地形的・地理的特徴（木村龍生説）

＊交通の要衝、穀倉地帯との関係、天然の要害地

＊可視範囲は菊鹿盆地のみ

b 史料上の施設

＊天安２年（858）２月　菊地城院兵庫　（日本文徳天皇実録）

＊天安２年（858）６月　菊地城院兵庫、不動倉　（日本文徳天皇実録）

＊元慶３年（879）３月　菊池郡城院兵庫　（日本三代実録）

c 鞠智城の考古学的画期　（図１）

第１期　７世紀第３四半期～第４四半期　創建期

第２期　７世紀末～８世紀第１四半期前半

コの字型建物群、八角形建物。土器等の遺物出土量が多く、内部施設が充実化。

第３期　８世紀第１四半期後半～第３四半期　礎石建物出現

第４期　８世紀第４四半期～９世紀第３四半期　礎石建物の大型化

第５期　９世紀第４四半期～10 世紀第３四半期　倉庫機能

d 第３期の特徴

＊矢野裕介氏による整理

・城の転換期にあたり、管理棟的建物群はそのまま存続するものの、掘立柱の総柱建物が礎石建物に建て替えられるなど、施設の耐久性向上が図られるのが特徴として挙げられる。その一方で、土器の出土が皆無に等しく、最低限

の人員が配置されるなど、城の管理・運営に変化が生じたのもこの時期となる。

＊木簡の出土

・「秦人忍□五斗」

3. 鞠智城の役割

a 坂本経堯氏以来、指摘されている３つの役割

＊大宰府の支援

＊有明海方面の防御

＊九州南部の夷狄対策

b まとめ

＊鞠智城の役割は、律令制国家の辺要政策との視点から考えれば、大宰府の維持と関連づけられて築城され、有明海方面の蕃国、九州南部の隼人対策のために設けられた。しかし、対隼人策の変更にともない、鞠智城の役割は変化したと思われる。ただし、文字史料では解明できず、鞠智城Ⅲ期（８世紀第１四半期後半から８世紀第３四半期）における考古学的調査の検討に待たざるをえない。最終的には、兵庫・不動倉の維持が重要になる。

むすびに

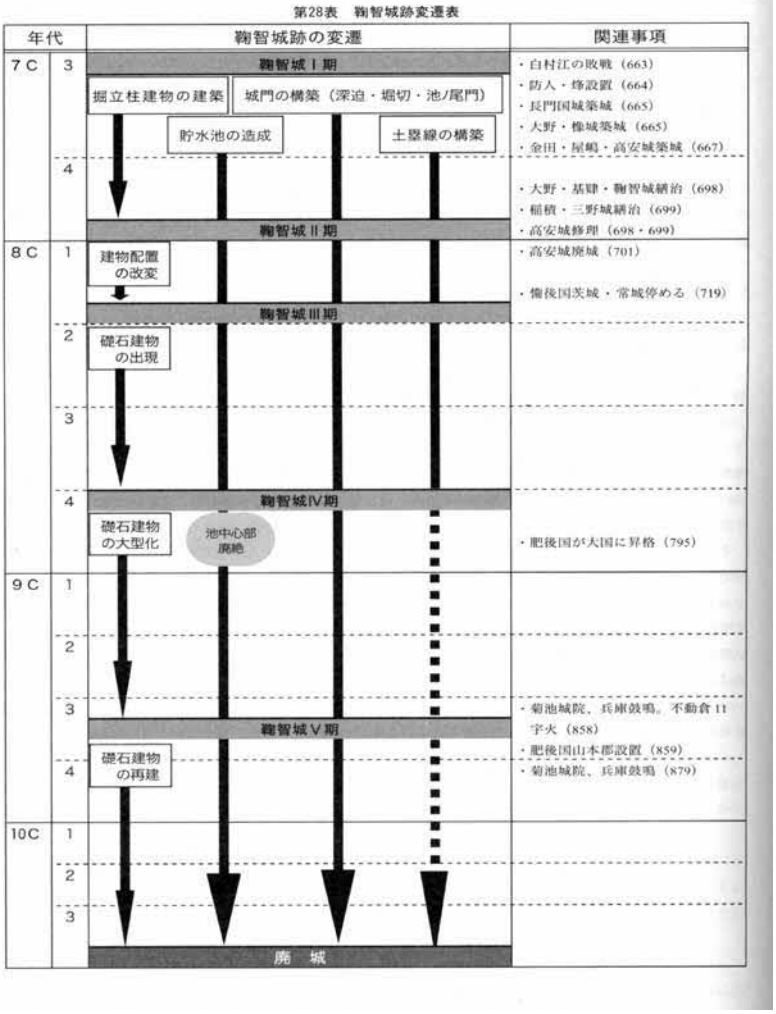
鞠智城の役割を、古代国家の辺要政策との関係という視点からみれば、次のようになる。筑紫（西海道）は、半島･大陸の蕃国と九州南部の夷狄（隼人）対策が必要な位置にあり、大宰府と筑紫城がその拠点として機能した。大野城・基肄城・鞠智城が、同時に繕治の対象となっていることは、大宰府防衛の一環であることを示すだろう。

また、白村江の敗戦以降は、唐・新羅への防御体制が構築され、対馬・壱岐から高安城までの防衛ライン（西日本防衛ラインと呼ぶ）がつくられた。しかし、西日本防衛ラインは大宝令施行後、唐・新羅との外交が安定化するとともに廃止された。

大野・基肄・鞠智城が筑紫城として維持されたのは、蕃国・夷狄に対する「西辺」の役割を持たされたからであるが、隼人への夷狄政策の変更にともなって、鞠智城の役割は変化したと思われる。その様相は、鞠智城Ⅲ期における発掘調査の結果から求めなければならない。その後は、いくつかの変遷があるが、兵庫・不動倉が重要な意味をもった。

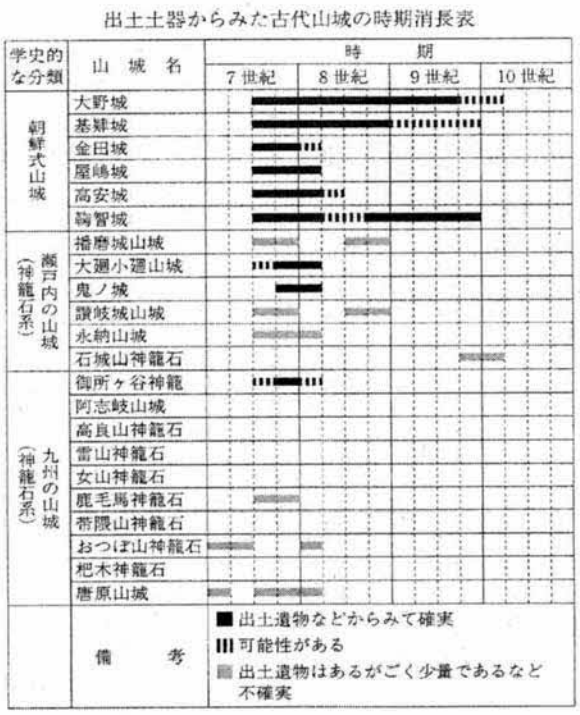
なお、筑紫には防人が派遣されたが、防人の派遣は停廃がある。防人停止中には、筑紫の兵士が動員されることになった。筑紫の兵士は､全国で兵士徴発が中止された時期にも、継続して徴発された。筑紫は「辺要」地域として兵士などの軍備が重視されたのである。

【図１】



（『鞠智城跡Ⅱ』）

【図２】



（赤司善彦図）

【8世紀の防人年表】

713　和銅6　　10防人派遣に専使から逓送へ
730　天平2　　9 諸国の防人を停止　［筑紫滞在の防人帰還策はなかったか］
737　天平9　　9 筑紫の防人を停止し、本郷に帰す。筑紫人に壱岐・対馬を守らせる［2000余人。「駿河・周防・筑後正税帳」に記載］
742　天平14　　1 大宰府を廃止する
745　天平17　　6 大宰府を復活する
757　天平宝字元　⑧ 東国が防人を発遣する。西海道7国兵士1000人を防人司に充てる
759　天平宝字3　3大宰府の上申に対し、東国防人は不許可、管内防人は10日を築城（怡土城か）に充てる
766　天平神護2　4大宰府が東国防人の再配置を請う。筑紫在留の東国防人を充て、筑紫6国兵士を減じ、不足分の東国から差発して防人3000人を充たす。
783　延暦2　　5残留希望者と逃亡防人で防御し、不足分を当土兵士から充てる
795　延暦14　　11防人を廃止し、兵士で対応する

【古代山城関係年表】

660　斉明5　　9唐・新羅による百済の滅亡が倭国に伝わる。
661　斉明6　　5斉明天皇が、朝倉橘広庭宮に遷る。7斉明没。
663　天智2　　8白村江の戦いで大敗。
664　天智3　　5唐使郭務悰が、表函・献物を進上する。この年、対馬島・壱岐島・筑紫国等に防と烽とを置き、筑紫に水城を築く。
665　天智4　　8長門国に城、筑紫国に大野・椽（基肄）の二城を築く。9唐使劉徳高・郭務悰と禰軍（旧百済官人）が、表函を進上する。遣唐使派遣。
667　天智6　　3近江大津宮に遷都。唐使が、遣唐使を筑紫に送る。11大和国高安城・讃岐国屋島城・対馬国金田城を築く。
668　天智7　　1天智天皇即位。9新羅が調を貢納する。唐が高句麗を滅ぼす。この年、唐が倭国征伐の船舶を修理するが、新羅攻撃かという（『三国史記』）。
669　天智8　　1蘇我赤兄が筑紫率。8高安城を造ろうする。冬に、高安城を修り内の田税を収む。9新羅が進調。この年、遣唐使を派遣。唐使郭務悰ら2000人が遣わされる。
670　天智9　　2戸籍（庚午年籍）を造り、盗賊・浮浪を断つ。高安城を修りて、穀と塩とを積む。また長門城一つ・筑紫城二つを築く。8新羅が高句麗王を冊立（唐・新羅の対立）。9遣新羅使。
671　天智10　　1冠位・法度を施行（「近江令」の存否）。唐使が上表。天智天皇没。
672　天武1　　6壬申の乱。大海人皇子が近江朝廷軍を破る。
673　天武2　　2大海人皇子が即位（天武天皇）。

675　天武 4　　2 天武が高安城に行幸する。3 栗隈王を兵政官長とする（栗隈王は壬申の乱時に筑紫大宰）。10 畿内の諸王･有位者に武装させる。〔676,679,684,685,693,699,700〕

676　天武 5　　2 唐が朝鮮半島支配を放棄する。

679　天武 8　　11 難波に羅城を築く。

683　天武 12　　11 諸国に詔して、陣法を習わせる。

685　天武 14　　11 軍用の楽器・兵器の私家所蔵をやめ、郡家に収める。

686　朱鳥 1　　9 天武天皇没。持統皇后称制。

689　持統 3　　6 浄御原令施行。戸籍作成（庚寅年籍）。兵士への武事教習。9 石上朝臣麻呂・石川朝臣蟲名らを筑紫に遣し、位記を給送する。また新城を監す。10 天武が高安城に行幸する。

690　持統 4　　1 持統天皇即位。

693　持統 7　　12 諸国に陣法博士を遣わし、兵法を教習させる。

694　持統 8　　12 藤原宮遷都。

698　文武 2　　4 南島に使を遣わし、国をもとめさせる。5 大宰府に、大野・基肄・鞠智三城を繕治せしむ。8 高安城を修理する〈天智 5 年築城〉。

699　文武 3　　9 天武が高安城に行幸する。11 南島より帰る。12 大宰府に、三野･稲積二城を修せしむ。

700　文武 4　　6 筑紫惣領に、覓国使を脅迫した薩末比売、衣評督･助督、肝衝難波 を処罰させる。〔覓国使は 698 年の遣使か、新たな遣使か〕10 筑紫惣領・　大弐を任ず。

701　大宝 1　　8 高安城を廃す。　大宝律令完成。

702　大宝 2　　8 命に逆らう薩摩・多褞を征討し、戸を校へ吏を置く。〔国司・島司〕10 唱更国司ら「国内要害の地に柵を建て､戍を置きて守らむ」と言う。

712　和銅 5　　1 河内国高安烽を廃す。

713　和銅 6　　4 大隅国を置く。

718　養老 2　　養老律令（施行は 757 年〈天平宝字 1〉）

719　養老 3　　12 備後国安那郡茨城、蘆田郡常城を停する。

756　天平勝宝 8　　6 怡土城を築く。

765　天平神護 1　　3 大宰大弐佐伯宿祢今毛人を築怡土城専知官、少弐采女朝臣浄庭を修理水城専知官とする。

【参考文献】

赤司善彦「古代山城研究の現状と課題」『月刊文化財』631，2016 年
伊藤　循『古代天皇制と辺境』同成社、2016 年
井上辰雄「大化前代の肥後」『正税帳の研究』塙書房、1967 年
小田富士雄『古代九州と東アジア Ⅱ』同成社、2013 年
狩野　久「瀬戸内古代山城の時代」『坪井清足先生卒寿記念論文集』2010 年
木村龍生「鞠智城の役割に関する一考察」『鞠智城跡Ⅱ』論考編 1、2014 年
鈴木拓也「軍制史からみた古代山城」『古代文化』61-4、2010 年
永山修一『隼人と古代日本』同成社、2009 年
三上喜孝「古代北方辺要国の統治システム」『古代国家と北方世界』同成社、2017 年
向井一雄『よみがえる古代山城』吉川弘文館、2017 年
八木　充「百済滅亡前後の戦乱と古代山城」『日本歴史』722、2008 年
矢野裕介「鞠智城の変遷に関する一考察」『大宰府の研究』2018 年
吉村武彦「列島古代史における鞠智城」『鞠智城 2017・2018 年度』
熊本県教育委員会、2019 年
熊本市『新熊本市史』史料編第二巻 古代・中世、1993 年　［肥後国関係史料］
熊本県教育委員会『鞠智城跡 Ⅱ』2012 年
熊本県教育委員会『鞠智城跡 Ⅱ』論考編 1・2、2014 年

熊本県教育委員会『古代山城 鞠智城を考える』山川出版社、2010 年
熊本県教育委員会『古代山城 鞠智城を考える』Ⅱ、2012 年
熊本県教育委員会『鞠智城シンポジウム』2012、2013 年度
熊本県教育委員会『鞠智城東京シンポジウム』2014 ～ 2016 年度
熊本県教育委員会『鞠智城 2017・2018 年度』2019 年
熊本県教育委員会『鞠智城シンポジウム 2019 年度』2020 年
熊本県教育委員会『鞠智城と古代社会』 1 ～ 8 、2013 ～ 2020 年
大宰府史跡発掘 50 周年記念論文集刊行会編『大宰府の研究』高志書院、2018

古代山城と地域社会－備中鬼ノ城を中心として－

亀田　修一（岡山理科大学教授）

はじめに

西日本地域に築かれた古代山城（小稿では朝鮮式山城・神籠石［こうごいし］系山城をあわせてこのように呼ぶ）に関する研究は、古くよりなされ、これまでの成果では、660年の百済滅亡前後の朝鮮半島における混乱、663年の白村江の戦いの敗戦を契機として、対唐・新羅用に築かれたとの考えがおもな意見と考えられる(図1)。ただ、細部ではいろいろな意見もある。

筆者はこれまで発表してきた論文など（亀田2009・2014・2015・2016・2018a・b・cなど）に記したように、660年の百済滅亡、663年の白村江の戦いの敗戦を契機として、ヤマト王権の主導のもの、百済から亡命してきた将軍・貴族たちが指導し、まず、北部九州、そしてその範囲を広げて、瀬戸内海沿岸地域、近畿地方に古代山城が築かれたと考えている。そして、いつまで造られたのかはよくわからないが、大多数の山城は8世紀初め頃にはその役目を終えたようである。

一方、これらの古代山城の築城目的として、筑前大野城や肥前基肄城などのように対唐・新羅防御用だけでなく、いわゆる神籠石系山城に関しては、地域支配のためであるという考えもある。ただ、筑前大野城や肥前基肄城に関しても、8世紀には防御用だけでなく、地域支配の用途に使用されたと考えられている。

小稿では、これらの古代山城と、それらが築かれた地域、地域社会との関わりについて述べたいと考えているが、今回はいろいろな特徴が明らかになっている備中鬼ノ城を素材として取り上げたい。

古代山城に関する諸先学の研究成果に関しては、報告書も含め多くのものがあるが、ここでは末尾におもなもの、今回の発表に関わるものをいくつかあげさせていただいた（小田1983・1985、宮小路・亀田1987、向井2010・2016など参照）。

１．備中鬼ノ城

備中鬼ノ城（きのじょう）は岡山県総社市奥坂に所在する鬼城山（きのじょうざん：標高396.6ｍ）に位置する（図２：高橋1976、鬼ノ城学術調査委員会1980、総社市教育委員会2005・2006・2011、岡山県教育委員会2006・2013、亀田2009）。南に下がる斜面部に城壁がめぐらされた城周2790ｍの土城である。この山城に関する古代の記録はなく、いわゆる神籠石系山城である。

古代の「国郡」は、「備中国賀夜（かや）郡」で「郷」はよくわからないが、鬼城山の南東の麓に「東阿曽・西阿曽」という地名が残っており、この付近が「阿曽郷（阿蘇郷・阿宗郷）」に比定されている。そのほかの周辺の郷名を検討すると、備中鬼ノ城が「阿曽郷」に含まれていた可能性はあると思われる。

（1）備中鬼ノ城の遺構・遺物の概要

城壁は基本的に基部に割石列石を配した版築土塁で築かれているが、一部石垣や石塁で築かれており、一般的な印象としては石城のイメージが強いようである。城壁は全周しており、城門跡が 4 ヵ所、通水口をもつ水門跡が 5 ヵ所、角楼跡が 1 ヵ所確認されている。4 ヵ所の城門跡には方形（3 ヵ所）と円形（1 ヵ所）の刳り込みをもつ唐居敷（からいじき、花崗岩切石）が使用されており、いずれも軸摺穴（じくずりあな）、方立て用の穴があけられている。西門跡南東部第 3 塁状区間には、いわゆる高石垣と呼ばれている石垣があるが、筆者はこの石垣の正面観における上部の石の積み具合の不揃い、石垣背後の掘方、裏込めの状況などから少なくとも一度、そして一部は修築されたのではないかと考えている（図 2・3）。

城内の施設としては、礎石建物跡が 7 棟、土手を持つ貯水施設跡が 2 ヵ所、溜井跡、烽火台跡（?）、鍛冶場跡 3 ヵ所などが確認されている。礎石建物跡は 2 × 6 間の側柱建物跡が 2 棟、3 × 4 間の総柱建物跡が 2 棟、3 × 3 間の総柱建物跡が 3 棟である。側柱建物跡の周辺では転用硯が出土しており、管理棟の可能性が考えられている。また鍛冶場の 1 ヵ所では段状遺構の中に 9 基の鍛冶炉跡が並び、上屋の存在も推測されている。そして 7 世紀後半の土器が出土している。また掘立柱建物跡に関しては、7 世紀後半～ 8 世紀前半のものと推測される確実なものは確認されていないようである。このほか明確な建物は確認できていないが、基壇状遺構と呼んでいる場所では基壇の一部である可能性がある石列が確認され、その付近で 7 世紀後半から 8 世紀前半の須恵器・土師器などがまとまって出土している。

出土遺物は、土器は一般的な杯類がほとんどである（図 4）が、須恵器甕や土師質の甕・鍋・甑などの煮炊き具を含み、そのほか円面硯、転用硯、鍛冶関係遺物、瓦塔、水瓶、隆平永寶（初鋳 796 年）などが出土している。時期的には 7 世紀後半から 8 世紀前半、そして 9 世紀から 11 世紀のものに区分されており、前者の遺物が山城関係、後者の遺物は宗教施設関係のものと考えられている。また、前者の土器は、7 世紀中葉～後半の可能性があるものが少々で、多くは 7 世紀末前後のものである。つまり、備中鬼ノ城は 7 世紀後半に築城され、8 世紀前半まで使用されるが、城としての機能はこの頃なくなり、9 世紀からは宗教施設して使用され、これが後の新山寺へつながった可能性が考えられている。

このように備中鬼ノ城は、城壁は完周し、門も構築され、城内に礎石建物などの施設があり、さらに城壁の修繕の可能性もあり、完成した城といって良いと思われる。

（2）備中鬼ノ城のいろいろな特徴とその背景

①城門構造

備中鬼ノ城では 4 ヵ所の城門跡が確認されている。いずれも立派な花崗岩製の唐居敷をもつ掘立柱構造の楼門と考えられている。柱の形は方形 (西門跡・南門跡・北門跡) と円形 (東門跡) がある。門を建造したグループの違いなのか、時間差なのかよくわからないが、いずれも床面に石を敷いている。そして西門跡と南門跡は門の奥側に石で作られた階段を

持っている。東門跡は奥側に大きな岩があり、ここに木のはしごのようなものを架けたのかもしれない。北門跡は奥側が平らになっており、階段などはない。門の通路部分側面の壁は、西・南門跡は板が貼られていたものと推測されているが、北門跡と東門跡は手前が板、奥が石垣のようである。

門の入口に関しては、西門跡は南からのスロープ (石敷き？) があり、北・南・東門跡は門の床面と外側の地面との間に高さ 2m ほどの段差があり、北門跡ではその段差部分に石垣が確認されている（図 5)。朝鮮半島の山城に見られる懸門（けんもん）のようである。さらに北門跡には床面中央に排水用の石組み溝が作られている。このような懸門で排水溝を持ち、通路側面が石垣になった例は 667 年に築かれた讃岐屋嶋城跡に見ることができる。さらに讃岐屋嶋城跡（高松市教育委員会 2003・2008・2019）と備中鬼ノ城北門跡はどちらも城内にはいると直進できずに左に曲がるようになっている。朝鮮半島の山城ではこのような構造を「内甕城（うちおうじょう)」と呼んでいる。

そしてこのような門構造は日本のほかの古代山城においては見ることができないが、朝鮮半島百済地域の忠清南道錦山栢嶺山城の南門跡に見られる（図 5-3、忠清南道歴史文化院 2007)。錦山栢嶺山城の南門跡は前面が少し壊れており、不確実ではあるが、門の床面と外側地表面には約 3m の段差がある。門礎などはわからないが、通路側壁には石垣がある。また門中央ではないが、石組みの排水溝も作られている。

このように錦山栢嶺山城の南門跡は全くそっくりというわけではないが、備中鬼ノ城北門と極めてよく似ている。錦山栢嶺山城の築城年代は出土した文字瓦から 6 世紀末頃または、7 世紀中頃と考えられている。

②水門構造

次に備中鬼ノ城では通水口を持つ水門跡が 5 ヵ所確認されており、その特徴として通水口の出口が外側地表面から 1 ～ 2 mほどの高さにあることである（図 6 左)。単純に地形との関わりでこのような高さになった可能性もあるが、日本で確認されている古代山城の通水口の出口は、一般的に外側地表面と同じ高さになっている。一部豊前御所ヶ谷神籠石（行橋市教育委員会 2006・2014）では外の地面から約 1.2m のところにあり、筑前大野城跡（福岡県教育委員会 2010）や肥前基肄城跡（田中 2016）で外側地表面からやや高いものがあるが、多くの古代山城の通水口出口は基本的に外側の地面に築かれており、備中鬼ノ城の通水口出口の位置はやはり気になる。

ちなみに、朝鮮半島においては百済地域の山城の通水口出口は地面に接するものが多く、朝鮮半島中部以東の新羅地域の山城のものは外側地面から離れたものが多いようである（図 6 右)。

③角楼跡

備中鬼ノ城で角楼（かくろう）と呼ばれているもの (図 7) は、朝鮮半島では雉（ち)、雉城（ちじょう）などと呼ばれており、基本的に城壁から方形に飛び出したもので、敵が攻めてきたときに 2 方向から矢を射かけることができるようにした防御用の施設である。同様の意味で半円形などに突出したものは曲城（きょくじょう）と呼ばれている。

このような方形突出部は日本で明確なものはほかに対馬金田城跡でしか知られておらず、そのほか讃岐屋嶋城跡でやや独立したものが、また筑前大野城跡で比較的類似するものが確認されている。ほかの古代山城では確認されていない特徴的な構造物である。

朝鮮半島では高句麗・新羅の山城において方形・半円形の突出部が比較的多く確認されており、百済においては一部で確認されている。前述の栢嶺山城においては築城時かどうかわからないが、方形の突出部が城壁に付加されている。韓国忠北大学校におられた車勇杰先生によると、新羅地域のものは横幅に対して長さが長く、百済地域のものは長さが短い傾向があるとのことである。これにしたがえば、備中鬼ノ城や対馬金田城跡の雉（角楼）は百済系といえそうである。

④城壁の築き方

この角楼では柱 (穴) が城壁の表面に埋め込まれた状況で確認された。城壁 (土塁・列石) の前面に柱が確認された例は九州の神籠石系山城では多数見られるが、城壁の中 (表面) に柱 (穴) が埋め込まれた例はないようであり、1 つの特徴といえそうである。

このような城壁表面に柱 (穴) が埋め込まれて確認される例は高句麗の平壌大城山城を始め、忠清北道禮山蛇山城（図 8：成・車 1994）など朝鮮半島中部地域に比較的見ることができる。百済地域においても大田月坪洞山城で見ることができるが、数はあまり多くないようである（山田 2000）。

また、城壁の内外床面の敷石 (図 3) は、日本の古代山城では明確なものは確認されていないようである。朝鮮半島においてもほとんど知られていないが、忠清北道蛇山城の城壁の外側に見ることができ (図 8)、百済後期の王城である扶蘇山城では城壁の内側に見ることができる。

そして、城壁の版築方法であるが、日本列島での古代の版築は山城の土塁や寺院建物の基壇に使用されており、朝鮮半島から伝えられた技術であると認識されている。

一般的に方形（長方形）に堰板を組み立て、その中に土を入れ、突き固めながら、高くしていくものである。しかし、これまで発掘調査された古代山城の土塁を詳細に検討すると、山の斜面に城壁を積み上げる場合は、3 つの壁（連続する場合は 2 つの壁になる）に堰板を使用した痕跡が確認できる、またはそのように推測できるものは備中鬼ノ城と筑前大野城跡の一部の土塁しかないようであり、ある面で簡略化したのか、その方法が理解されていなかったようである。いずれにせよ、朝鮮半島からの技術伝播のあり方の検討材料の一つになっている（亀田 2018a）。つまり、備中鬼ノ城に関しては、より正確な版築技法が伝えられていた可能性があるのである。

⑤花崗岩加工技術

最後に、花崗岩加工技術について述べる。この場合の加工は、単に「割る」「調整する」ではなく、表面を「平らに、またはきれいに加工する」という意味での加工技術である。

日本列島において花崗岩をきれいに加工した例は一部古墳時代前期や中期に見られるが、一般的に見られるようになるのは飛鳥時代に入る頃、6 世紀末～ 7 世紀初め頃以降と考えている（亀田 2001）。寺院の礎石などに花崗岩が使用されるときにこのような加工技

術が使用されるようになったものと推測されている。

そして、古代山城においては、城門の唐居敷や北部九州の神籠石系山城の列石にこの花崗岩加工技術が使用されている。7 世紀の横穴式石室や古墳の墳丘構築にこの切石加工が使用される例もあるが、やはり珍しい例であり、特に地方ではほとんど見かけないものである。7 世紀後半（末）であれば、古代寺院の造営が地方に広がる時期であり、古代山城築造と連動して展開する可能性はあるが、このような花崗岩加工技術の各地域における展開に関しては、地域ごとに検討する必要があろう。

ちなみに、備中鬼ノ城周辺では下道郡秦原廃寺の塔心礎などが 7 世紀前半のものと推測されており、この地域では最古段階のものであり、少なくとも備中鬼ノ城の唐居敷よりは古く、秦原廃寺で使用された花崗岩加工技術が備中鬼ノ城で使用された可能性は十分ある（葛原 1998）。秦原廃寺は、備中鬼ノ城の西南西約 6㎞、総社市秦に位置し、下道郡秦原郷に属していた古代寺院跡である。創建瓦は山背広隆寺の初期の瓦と類似しており、山背秦氏と関わる寺院と考えられている（湊・亀田 2006）。

このように、現状では備中鬼ノ城の城門の唐居敷作りには賀夜郡の西隣に位置する下道郡の秦原廃寺関連の技術者が動員された可能性が推測できるのである。

以上のように備中鬼ノ城には日本のほかの古代山城とは異なる特徴がいくつかあり、いずれも朝鮮半島の山城との関連が推測できそうである。日本の古代山城はおもに百済との関わりが考えられているが、備中鬼ノ城のいろいろな特徴は、単に百済地域の山城との関係だけでは説明できないようである。背後に高句麗とつながる朝鮮半島中部地域の新羅山城も念頭において比較研究すべきようである。

さらにこのような特徴は当然具体的な築城者を意識すべきと考えるが、そこには 7 世紀後半の朝鮮半島の百済などからの亡命者・渡来人たちだけでなく、それ以前からこの吉備地域に移り住んでいた渡来系の人々の存在も念頭において考える必要があると思っている。例えば、花崗岩加工技術に関して述べた秦原廃寺の塔心礎などとの関わりである。

（3）備中鬼ノ城が築かれた地域

備中鬼ノ城が築かれた場所は、「備中国賀夜郡」である。詳細な郷はよくわからないが、「阿曽郷」の中、またはその近くであると推測される（史料 1、図 9）。

この賀夜郡の当時の様子を教えてくれる数少ない文字史料が、『正倉院文書』の「備中国大税負死亡人帳」（天平 11［739］年）である（竹内 1962）。この史料によって、まさにこの「阿蘇郷」の 8 世紀前半頃の人々を知ることができるのである。

「備中国大税負死亡人帳」の阿蘇郷に記されている人物は、宗部里の戸「西漢人部麻呂」、戸「羅曳連豊嶋」、磐原里の戸主「史戸阿遅麻佐」の口「西漢人部事无賣」である。

この「宗部里」の「宗部」は「宗我部」であろうと吉田晶によって指摘されており（吉田 1990、p.103）、この地域が蘇我稲目による 555 年の白猪屯倉（しらいのみやけ）設置と関わることがわかるのである。「羅曳連豊嶋」はよくわからないが、残りの 3 名は近畿地方と関わる渡来系の人々と考えられ、白猪屯倉設置に伴ってこの吉備の地、備中鬼ノ城

の麓の地域に入ってきたと考えられる。

「備中国大税負死亡人帳」の賀夜郡には、ほかに庭瀬郷三宅里：忍海漢部真麻呂、庭瀬郷山埼里：忍海漢部得嶋・忍海漢部麻呂、大井郷粟井里：東漢人部刀良手、さらに、都宇郡には、建部郷岡本里：西漢人志卑賣、河面郷辛人里：秦人部稲麻呂・秦人部弟嶋、撫川郷鳥羽里：服部首八千石・史戸置嶋・史戸玉賣　などの渡来系の人々の名前を見ることができる。

これらの史料を検討した直木孝次郎は千引カナクロ谷遺跡などの製鉄遺跡が発掘調査される以前からこれらの渡来系の人々と鉄との関わりを述べていた（直木 1983）。阿曽郷の東隣（備中鬼ノ城の東側）に位置する賀夜郡大井郷粟井里に「東漢人部刀良手」など渡来系の人物の名前が見られるが、この大井郷は平城宮跡出土木簡の「大井鍬十口」の「大井」と考えられており、まさにこの阿曽郷とその周辺地域において渡来人たちの新しい技術を導入して鉄が造られ、鍬などの鉄製品が生産され、そして都へ運ばれていたことが推測できるのである。

さらに、賀夜郡庭瀬郷には「三宅里」があり、そこに「忍海漢部真麻呂」という人物がいたことが記されている。この「三宅里」は素直に読めばこの地域に屯倉関連のものがあったと推測できる。また「忍海漢部真麻呂」は本来大和葛城地域と関わる渡来系の人物と考えられる。この葛城地域は 5 世紀後半の雄略天皇代に葛城氏の勢力が削がれ、その後その権益を蘇我氏が受け継いだと考えられている（加藤 1983、千賀 2020）。このことから「忍海漢部」も蘇我氏の白猪屯倉・児島屯倉に関わって吉備の地へ移住させられた渡来系の人物の子孫である可能性が考えられるのである。さらに忍海部に関しては、『肥前国風土記』に記された三根郡漢部郷の忍海漢人が武器を作ったという記事から「忍海部」はもともと武器武具製造に関わっていたと考えられている（関 1966、p.89）。そうすると吉備を代表する鉄器生産遺跡である窪木薬師遺跡（5 世紀前半～ 7 世紀前半）が位置する賀夜郡服部郷とは郷が異なり、距離も約 6.5km 離れているが、6 世紀代に鏃・刀子・直刀などが作られていた窪木薬師遺跡と何らかの関わりがあった可能性は無視できない（岡山県教育委員会 1993）。

また、現時点で日本列島最古の製鉄遺跡である千引カナクロ谷遺跡を含む奥坂遺跡群（6 世紀後半～ 8 世紀前半の製鉄関連遺跡 6 ヵ所で、製鉄炉が 20 基、横口付木炭窯が 24 基確認されている。総社市教育委員会 1999）が位置する地域は、まさに備中鬼ノ城の麓に位置し、律令期には賀夜郡阿蘇（曽）郷に属している。この遺跡群が操業していた最後の時期と「備中国大税負死亡人帳」に記された人々が生活していた時期は重なるのである。

（4）いつ、だれが、どのように、備中鬼ノ城を築いたか（図 10）

備中鬼ノ城はどのように造営されたか。「はじめに」で述べたような考えが正しければ、発注者はヤマト王権と考えることが素直であろう。次に、だれが、この場所を選んだのか。

663 年の白村江の戦いにおける敗戦を契機として、まず、664 年に水城、665 年に長門城、筑前大野城、肥前基肄城が築かれ、そして 667 年に対馬金田城、讃岐屋嶋城、河内・大和国境に高安城が築かれた。筆者は、これまでも述べてきたように、備中鬼ノ城もこの頃に造営されたと考えている。

つまり、朝鮮半島から大和までの陸・海の交通の要衝に山城を築く意図があり、備中鬼

ノ城もこの意図に沿って、この地が選ばれ、築かれたと考えている。

そうすると、現在の備中鬼ノ城の場所を選んだ人物は、少なくともこのような山城を使っての防御体制を理解している人物と考えられる。当時のヤマト王権の倭人の中にこのようなことができる人物がいたのであろうか。筆者は、このような山城の配置を考え、防御網を描くことができた人物は純粋な倭人ではなく、百済滅亡前後に日本列島に渡って来た将軍・貴族たち、またはそれ以前に日本列島に来ていた渡来系の人物、その子孫たちであったと考えている。

具体的には、『日本書紀』天智天皇 4 年（665）条にあるように、長門城を達率答炑春初、大野城と基肄城を達率憶禮福留と達率四比福夫らが分担して、指導して築いているので、備中鬼ノ城に関しても、このような人物が来て、指導して、選地・縄張などを行ったのではないかと考えている。

そして、実際の工事をだれが行ったかであるが、選地・縄張を行った達率クラスの人物がこの地に張り付いて指導し、造営したのであろうか。瀬戸内海交通の要衝である吉備であるから、その可能性も十分考えられるが、やはり実際の工事においては、現場監督のような現地で具体的に指導する人物が必要であったと考えている。少なくとも、この地のいろいろな陸路・海路などの交通網、土地の様子を知る人物がいないと、作業は簡単に進まなかったのではないであろうか。

つまり、このような現場監督、または現地の指導者には、達率や将軍たちの補佐クラスの人物と地元の多少なりともそのようなことを手伝うことができる人物が必要であったと考えている。百済滅亡前後に日本列島に渡って来た人物、朝鮮半島の山城作りに何らかの形で関与した渡来系の人物、築城に関する情報を聞くことができた渡来系の人物、そして地元の有力者が必要であったと考えている。また、地元の有力者が自ら築城に関与することも可能であるが、その人物が推薦する人物でも可能であろう。その場合、その周辺には少なくとも渡来系の人々がいたと考えることが素直であろう。

こうして、実際の築城に必要ないろいろな技術者、土塁を築く、版築を指導する、足場を組む、石材を加工する、水門を含めた石積み城壁の石を積む、門を建てる、角楼を造る、城内の管理棟・倉庫を建てる、それらの工事に使用する鉄製工具類を作る、それらの工事に必要な土・石・木などの素材をどこからどのように集めるのか、実際の作業を行う人々をどのように集めるのかが、現場監督およびその周辺の作業チームの仕事になると考えている。このような総合プランナーはやはりある程度の経験者でなければ難しいのではないであろうか。

百済から亡命してきた人々の中のこのような知識や技術を持った将軍、工兵部隊の責任者クラスの人物、工兵部隊のような仕事をしていた人々などが、地元のそのような作業を行うことができる技術者（おもに渡来系の人々、そして一部倭人）や実際の作業をする人々（おもに在地の倭人たち）を集め、指導しながら築城していったのではないであろうか。

以上のような想定をすると、「備中国大税負死亡人帳」に記された人々やその親兄弟の中に備中鬼ノ城の築城や修繕に参加した人物もいたかもしれない。

城周約 2.8㎞の土塁を築き、4 ヵ所の城門を建て、城内に管理棟や倉庫を建てるなどこれまでのこの地域の人々が見たことがなく、関わったことがない大規模な工事であること

から、単に地元である賀夜郡の人々だけでなく、備中国全域の技術者や作業者が動員された可能性は高いのではないであろうか。少なくとも近隣の都宇郡、窪屋郡、そして下道郡の人々（例えば秦原廃寺関連の石工さんたち）は動員された可能性が高いのではないであろうか。

前項までに述べてきたように備中鬼ノ城にはほかの古代山城には見られないいくつかの特徴がある。角楼の存在、門に懸門構造を使用していること、北門跡の甕城構造、東門跡とそれ以外の門の唐居敷に残された柱の形の違い、ほかの山城の土塁には見られない柱を土塁に埋め込んで築く技術、堰板をきちんと使った版築土塁構築技術など、ほかの山城と異なる多くの特徴がみられる。東門跡とそのほかの門の柱の違いは時間的な違いかもしれないし､同時並行作業中の施工グループの違いかもしれない。中近世の城作りにおける｢割普請｣のようなことも十分推測できる。

このような備中鬼ノ城の多様な特徴は、築城に関わった人々の多様性を反映している可能性が十分推測できるのである。

弥生時代以来のこの地の人々、5 世紀頃におもに加耶南部地域から入ってきた人々、6 世紀後半以降に畿内を経由して入ってきた新たな加耶（･新羅）系の渡来人たち、そして、白村江の戦い前後以降に入ってきたおもに百済系の人々など、もともとのこの地の人々と融合しながら定着していった渡来系の人々が備中鬼ノ城築城に関与することでほかの山城には見られない特徴的・個性的な山城が完成したのではないであろうか。

また、これらの技術者の動員や具体的な作業が進んだ背景には、ヤマト王権中枢部にいた蘇我稲目・馬子親子が関与した白猪屯倉・児島屯倉の存在も大きな意味を持ったのではないかと考えている。百済系渡来人である王辰爾（おうしんに）の甥、胆津（いつ）による田部の丁籍（たべのよぼろのふみた）の検定という作業も大きな意味を持ったのではないであろうか。

２．備中鬼ノ城築城モデルからみた筑前大野城築城

前章でみたように備中鬼ノ城の築城の様子が推測できるならば、同様の方法で筑前大野城を考えるとどうなるであろうか。簡単に述べてみたい。

まず、発注者はヤマト王権であり、選地・縄張は百済からの亡命将軍・貴族である達率憶禮福留と達率四比福夫が指導して行ったと推測される。現場監督には彼らとともに亡命してきた彼らの部下であり、城作りに関与したことがある工兵部隊のメンバーたちがなった可能性が高そうである。ただ、彼らだけでは地元の技術者や作業者を集めることはできないので、地元の有力者や築城以前からこの地に定着していた渡来人たちの協力も得たと思われる。

地域的にはのちの筑前国御笠郡と糟屋郡に属したようであり、御笠郡や糟屋郡の人々、例えば御笠郡域では御笠郷や大野郷などの人々がまず集められたと推測される。御笠郷の地域はまさに大宰府がおかれた地域であり、7 世紀後半以降の九州の中心地となる場所である。そして大野郷は山城である筑前大野城跡の西側麓にひろがる地域と推測されてお

り、近年様子がわかってきた大野城市乙金地区遺跡群（上田 2017、大野城市教育委員会 2017 など）が含まれる地域である。新羅系と馬韓系の人々の存在が推測でき、鉄器作り、須恵器作り、農地開発、交通路管理など多様な仕事を行っていたことが推測できる遺跡群である。そして那津官家との関わりも推測できる。

筑前大野城築城にこの地域の人々が動員された可能性は十分あると考えている。備中鬼ノ城における賀夜郡と同じように、御笠郡・糟屋郡の人々、例えば大野郷・御笠郷の多くの人々が技術者として、作業者として参加したと推測される。そして備中鬼ノ城よりもずっと大規模な山城であり、当然御笠郡・糟屋郡だけでなく、その周辺、そしてより広く筑前、筑後の人々が動員されたものと推測される。もしかするとより広く豊前地域の人々も動員されたかもしれない[(1)]。

おわりに

古代山城と、それらが築かれた地域、地域社会との関わりについて、備中鬼ノ城を素材として述べてきた。具体的には、備中鬼ノ城の多様な個性の背景、そしてどのように築城されたのかを地元の賀夜郡との関わりで述べてきた。

吉備は朝鮮半島から北部九州、そして畿内へ至る陸・海の交通の要衝にあり、備中鬼ノ城の築城に関しては、国家の意志・意識が強く反映していると考えている。

具体的な築城の様子を推測すると次の通りである。

まず、発注はヤマト王権であり、選地・縄張などは百済から亡命してきた将軍クラスの人物などが担当したと推測される。そして、現地に張り付いて指導した現場監督、現地指導者のような人物は、亡命将軍の補佐クラスの人物と地元の多少なりともそのようなことを手伝うことができる人物（有力者・渡来系の人々など）が必要であったと考えている。

また、いろいろな技術者、実際の作業を行う人々も当然必要である。備中鬼ノ城築城は大規模な工事であり、単に地元である賀夜郡の人々だけでなく、備中国全域の技術者や作業者が動員されたものと推測される。近隣の都宇郡、窪屋郡、下道郡の人々も動員されたであろう。

弥生時代以前からのこの地の人々、5 世紀頃におもに加耶南部地域から入ってきた人々、6 世紀後半以降に畿内を経由して入ってきた新たな加耶（・新羅）系の渡来人たち、そして、白村江の戦い前後以降に入ってきたおもに百済系の人々など、もともとのこの地の人々と融合しながら定着していった渡来系の人々が備中鬼ノ城築城に関与することでほかの山城には見られない特徴的・個性的な山城が完成したのではないであろうか。

天平 11 年（739）の「備中国大税負死亡人帳」に記された人々の親兄弟の中に備中鬼ノ城の築城に参加した人物がいたかもしれない。記された本人のなかにも城壁の修繕などに参加した人物もいるかもしれない。

また、これらの技術者や作業に参加した人々の動員などには、ヤマト王権によってこの地に置かれた白猪屯倉なども大きな意味を持ったのではないかと考えている。特に白猪史胆津が作成した田部の丁籍は大きな意味を持ったのではないであろうか[(2)]。

［註］
(1) 筑前大野城が築かれた地域のことについては、九州歴史資料館の松川博一さん、酒井芳司さんにご教示いただいた。記して謝意を表したい。
(2) 鬼ノ城築城の政治的な背景として、吉備の総領・大宰との関わりも重要であるが、今回は触れることができなかった。また、機会を改めて検討してみたい。

［参考文献］
明日香村教育委員会 2006『酒船石遺跡発掘調査報告書』
上田龍児 2017「Ⅴ章　総括　3 節　古墳時代の乙金地区遺跡群」『乙金地区遺跡群 23　中巻』大野城市教育委員会、177-180
大野城市教育委員会 2017『乙金地区遺跡群 23』
岡山県教育委員会 1993『窪木薬師遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
岡山県教育委員会 2006『国指定史跡鬼城山』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 203
岡山県教育委員会 2013『史跡鬼城山 2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 236
小田富士雄編 1983『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書 10、名著出版
小田富士雄編 1985『西日本古代山城の研究』日本城郭研究叢書 13、名著出版
加藤謙吉 1983『蘇我氏と大和王権』吉川弘文館
亀田修一 2000「鉄と渡来人－古墳時代の吉備を対象として－」『福岡大学総合研究所報』240、165-184
亀田修一 2001「朝鮮半島の石造物と亀」千田稔・宇野隆夫編『亀の古代学』東方出版、56-75
亀田修一 2009「四　鬼ノ城と朝鮮半島」『シリーズ『岡山学』7　鬼ノ城と吉備津神社－「桃太郎の舞台」を科学する』岡山理科大学『岡山学』研究会、58-71
亀田修一 2014「古代山城は完成していたのか」熊本県教育委員会編『鞠智城跡Ⅱ―論考編―』
亀田修一 2015「古代山城を考える―遺構と遺物―」岡山県古代吉備文化財センター編『古代山城と城柵調査の現状』平成 27 年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第 28 回研修会発表要旨集、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会
亀田修一 2016「西日本の古代山城」須田勉編『日本古代考古学論集』同成社
亀田修一 2018a「日本列島古代山城土塁に関する覚書－版築・堰板について－」『水利・土木考古学の現状と課題Ⅱ』大韓民国ウリ文化財研究院
亀田修一 2018b「繕治された大野城・基肄城・鞠智城とその他の古代山城」『大宰府の研究（大宰府史跡発掘調査 50 周年記念論文集）』高志書院
亀田修一 2018c「古代山城の成立と変容」『鞠智城・古代山城シンポジウム－古代山城の成立と変容－』熊本県教育委員会
鬼ノ城学術調査委員会 1980『鬼ノ城』
葛原克人 1998「第 1 章　総社の夜明け　第 5 節　寺院と山城の築城」総社市史編さん委員会編『総社市史　通史編』総社市

熊本県教育委員会 2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第 8 ～ 32 次調査報告－』
成周鐸・車勇杰 1994『禝山蛇山城』（財）百済文化開発研究院
関晃 1966『帰化人』至文堂
総社市教育委員会 1999『奥坂遺跡群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 15
総社市教育委員会 2005・2006『古代山城鬼ノ城』1、2、総社市埋蔵文化財発掘調査報告 18、19
総社市教育委員会 2011『鬼城山－国指定史跡鬼城山環境整備事業－』
高橋護 1976「鬼城山・築地山」『考古学ジャーナル』117、ニュー・サイエンス社
高松市教育委員会 2003『史跡天然記念物屋島－史跡天然記念物屋島基礎調査事業報告書Ⅰ－』
高松市教育委員会 2008『屋嶋城跡Ⅱ－史跡天然記念物屋島基礎調査事業報告書Ⅱ－』
高松市教育委員会 2019『史跡天然記念物屋島－史跡天然記念物屋島基礎調査事業報告書Ⅲ－』
竹内理三編 1962『寧樂遺文　上巻』東京堂出版、316-319
田中正弘 2016「基肄城（佐賀県）」『季刊考古学』136、雄山閣、29-31
千賀久 2020「渡来系移住民がもたらした産業技術－畿内地域の鍛冶生産と馬生産－」吉村武彦編『シリーズ古代史をひらく　渡来系移住民－半島・大陸との往来－』岩波書店、83-142
忠清南道歴史文化院 2007『錦山栢嶺山城－ 1・2 次発掘調査報告書－』
直木孝次郎 1983「吉備の渡来人と豪族」藤井駿先生喜寿記念会編『岡山の歴史と文化』福武書店、73-91
福岡県教育委員会 2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』
湊哲夫・亀田修一 2006『吉備の古代寺院』吉備考古ライブラリィ 13、吉備人出版
宮小路賀宏・亀田修一 1987「神籠石論争」『論争・学説日本の考古学 6 歴史時代』雄山閣
向井一雄 2010「古代山城研究の成果と課題－近年の調査成果からみた新古代山城像－」『季刊邪馬台国』105、梓書院
向井一雄 2016『よみがえる古代山城－国際戦争と防衛ライン－』歴史文化ライブラリー 440、吉川弘文館
村上幸雄・乗岡実 1999『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備考古ライブラリィ 2　吉備人出版
山田隆文 2000「韓国における城壁築城技法の一類型」『東洋史苑』56
行橋市教育委員会 2006・2014『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅰ・Ⅱ』
吉田晶 1990「第 1 章 吉備と大和　第 4 節 吉備の部民」『岡山県史 3 古代Ⅱ』岡山県、97-120
［引用挿図］（いずれも一部改変引用）
図 1：村上・乗岡 1999、図 2：総社市教育委員会提供、図 3・図 5-2：総社市教育委員会 2005、図 4：岡山県教育委員会 2013、図 5-3：忠清南道歴史文化院 2007、図 8：車勇杰氏提供、その他：亀田作成

○備中國大税負死亡人帳　字面ニ「備中國印」アリ○正倉院文書

（備中國天平十一年大税負死亡人帳從七位下行目日根造諸人）

備中國司解　申天平十一年大税負死亡人事

合九郡死亡人壹伯貳拾漆人　免税陸阡肆伯漆拾玖束

漆把穎五千八百五十三束七把　穀六十二斛六斗

賀夜郡死亡人貳拾參人　免税壹阡壹伯貳拾束伍把

庭瀬郷死亡人貳人　免税伍拾貳束

三宅里戸主忍海漢部眞麻呂　貳拾貳束天平十一年六月十一日死

山埼里戸忍海漢部得嶋口忍海漢部麻呂　參拾束天平十一年十月五日死

板倉郷死亡人貳人　免税參拾陸束

板倉里戸主鳥取部伎美麻呂口山守部嶋賣　陸束天平十一年七月五日死

委文里戸中臣忌寸連鯨口中臣忌寸連荒鹿火　參拾束天平十一年九月廿日死

葦守郷死亡人陸人　免税貳伯伍拾貳束

三井里戸弓削部連田道　貳拾束天平十一年十一月十一日死

戸主物部大海口出雲部羊賣　拾束天平十一年五月十六日死

猶見里戸主建部臣大山口建部臣惠師賣　陸束天平十一年三月廿六日死

戸出雲部小麻呂　捌束天平十一年三月十日死

戸主建部千先口建部氣津賣　壹伯肆束天平十一年五月廿七日死

建部智麻賣　壹伯肆束天平十一年六月十日死

大井郷死亡人貳人　免税壹伯參拾陸束

田後里戸生部首加都良　壹伯貳拾陸束天平十一年五月廿五日死

粟井里戸東漢人部刀良手　拾束天平十一年六月廿六日死

阿蘇郷死亡人參人　免税壹伯束

宗部里戸西漢人部麻呂　貳拾束天平十一年九月七日死

戸羅曳連豊嶋　漆拾束天平十一年七月八日死

磐原里戸主史戸阿遲麻佐口西漢人部事无賣　拾束天平十一年三月十四日死

八部郷死亡人壹人　免税壹伯伍拾束

美濃里戸主賀陽臣惠理麻呂口賀陽臣路　壹伯伍拾束天平十一年五月四日死

日羽郷死亡人參人　免税壹伯漆拾束伍把

宍粟里戸主川人（備後ヵ）麿口川人部大伴　拾束天平十一年十月六日死

戸闕部小足肆拾束天平十一年八月五日死

狭野里戸主賀陽臣小牧口白髮部臣眞虫賣　壹伯貳拾束伍把天平十一年五月廿五日死

多氣郷死亡人貳人　免税肆拾肆束

物部里戸主物部得安口物部阿曇　拾肆束天平十一年五月十八日死

田次里戸主犬甘部首土方口山守部身足　參拾束天平十一年三月廿五日死

有漢郷死亡人貳人　免税壹伯捌拾束

史料１「備中国大税負死亡人帳」賀夜郡の部分

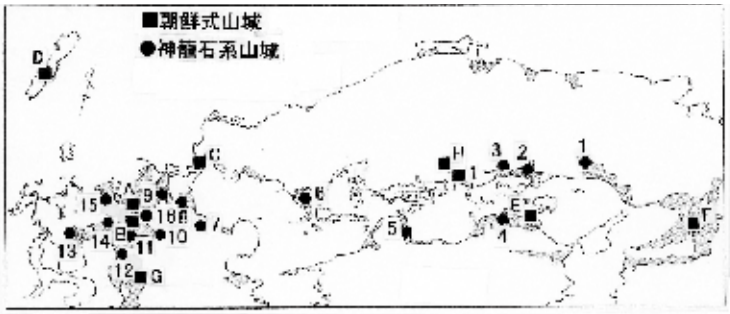


図1 古代山城の分布

A. 大野城跡 B. 基肄城跡 C. 鷹門城 D. 金田城跡 E. 屋嶋城跡
F. 高安城跡 G. 鞠智城跡 H. 茨城 I. 常城
1. 播磨城山城跡 2. 大福小廻山城 3. 鬼ノ城 4. 讃岐城山城跡
5. 永納山城跡 6. 石城山神籠石 7. 唐原山城跡 8. 御所ヶ谷神籠石
9. 鹿毛馬神籠石 10. 肥木神籠石 11. 高良山神籠石 12. 女山神籠石
13. おつぼ山神籠石 14. 帯隈山神籠石 15. 雷山神籠石 16. 阿志岐城跡

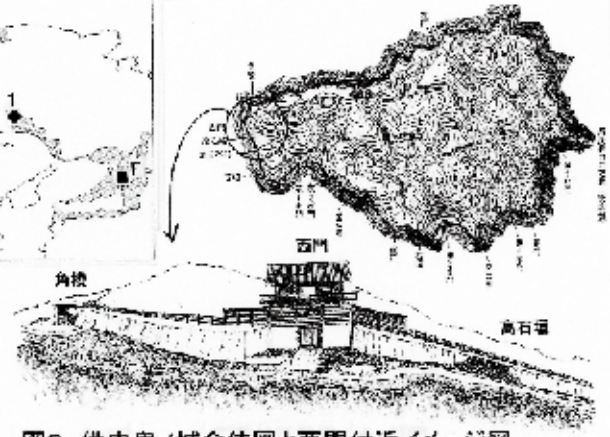


図2 備中鬼ノ城全体図と西門付近イメージ図

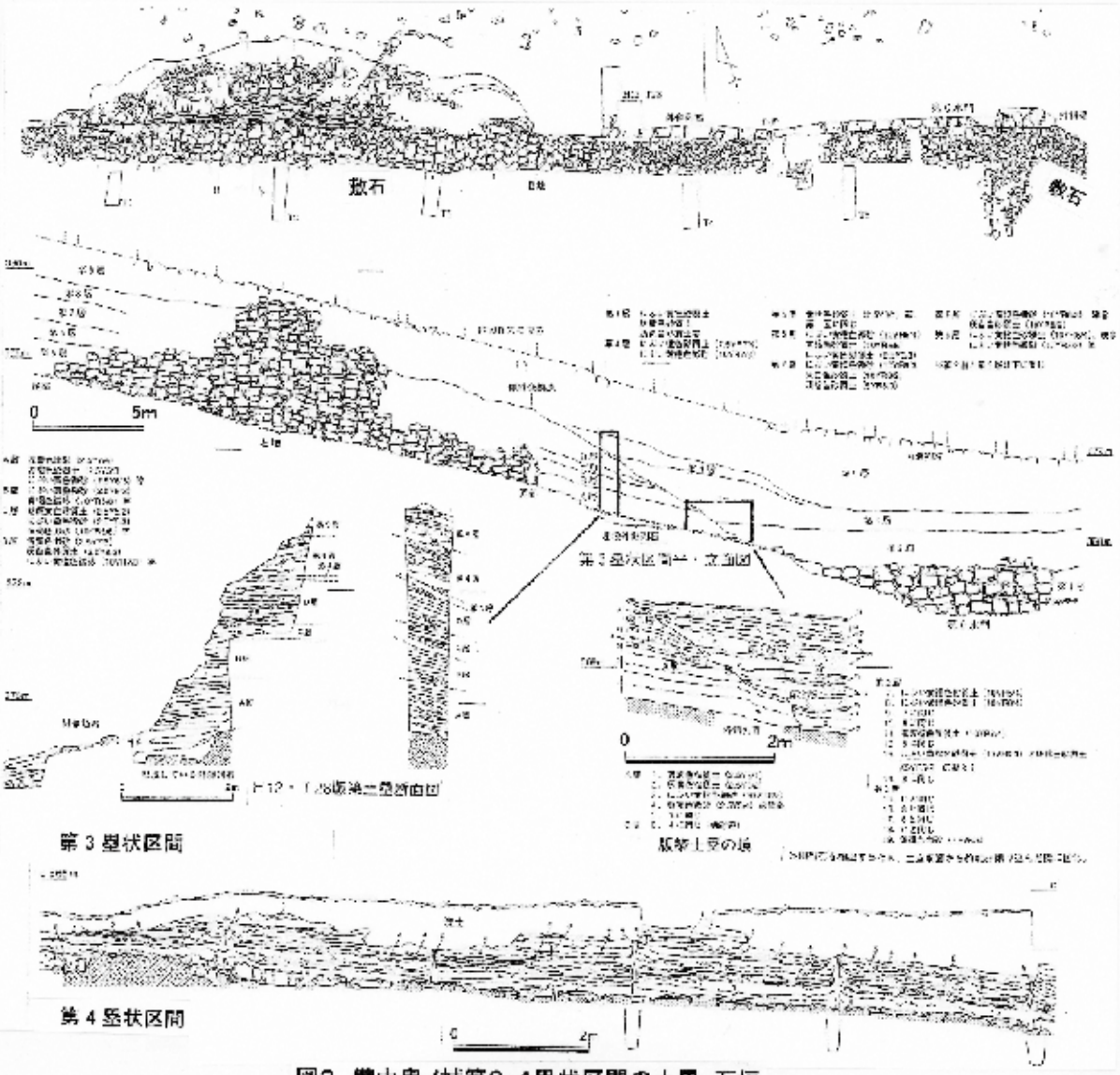


図3 備中鬼ノ城第3・4堡状区間の土塁・石垣

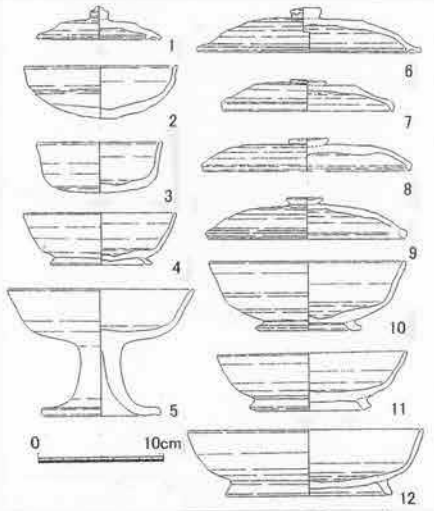


図4　備中鬼ノ城出土土器(1/8)

図5　備中鬼ノ城北門跡写真(1)・図面(2)・錦山栢嶺山城(3)

図6　備中鬼ノ城第1水門跡(左)と
忠清北道沃川城峙山城水口(右)

図7　備中鬼ノ城角楼

図8　忠清北道稷山蛇山城城壁・敷石

図9　備中南東部地域の朝鮮半島関係遺跡

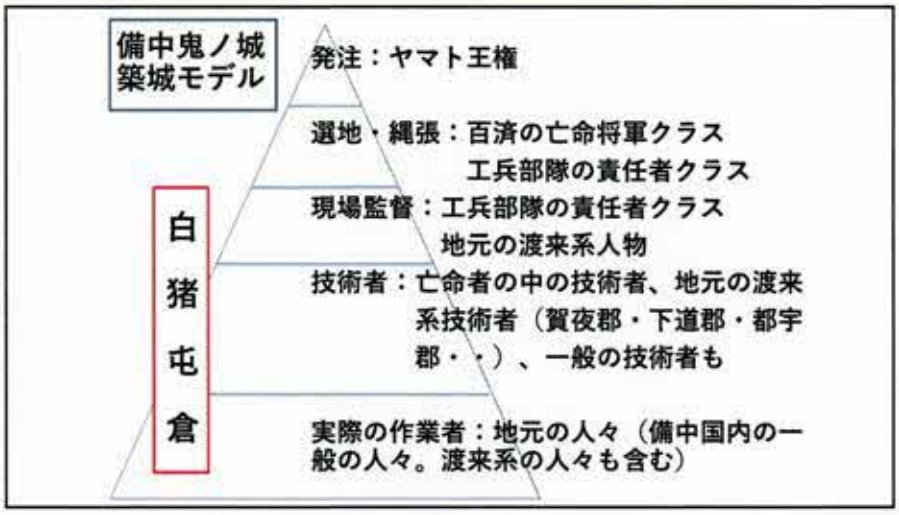


図10　備中鬼ノ城築城に関わった人々

(MEMO)

鞠智城跡出土瓦

古代肥後の地方豪族と鞠智城

溝口優樹（中京大学講師）

はじめに

古代山城は、天智２年（663）における白村江の敗戦をうけ、倭王権の主導によって北部九州から瀬戸内、さらには畿内の各地に築造された防衛施設である。こうした築造時期や立地は、古代山城が唐･新羅による侵攻に備えて造られたものであることを示している。

現在の熊本県菊池市・山鹿市にまたがる米原台地に築かれた鞠智城も、そうした古代山城のひとつである。ただし、菊池川中流域に位置し、そこから有明海を臨めないという立地からは、対外防衛的な機能を疑問視するむきも少なくない。こうした疑問から提起されるようになったのが、現地の豪族を牽制するために鞠智城が築かれたとする説である。

その一方、鞠智城の築造が倭王権あるいは大宰府によって主導されたものであったとしても、労働力編成などの面で現地勢力の協力は不可欠であろう。倭王権の地方支配制度に目を向けると、鞠智城を含む古代山城が築かれた７世紀第３四半期は、評―五十戸制の時代であった。評の官人には、かつて国造・伴造・県稲置としてミヤケをおさめてきた豪族たちが任命された。鞠智城が所在した菊池郡あるいはその前身となった評の成立時期は不明であるが、現地の評も築城に関与したことであろう（鞠智城を維持するために菊池郡の前身となる評が立てられた可能性や、山鹿郡あるいは合志郡の前身となる評が鞠智城の所在地を管轄していた可能性も考慮する必要があろう）。このように、鞠智城の造営体制を考えるうえでも、現地勢力に対する視点は欠かせない。これまでにも、鞠智城の築造に協力した現地の豪族を追求する研究がおこなわれてきた。

いずれにせよ、鞠智城の機能や築城の背景などを考えるうえで、現地の勢力は無視できない。こうした問題関心から、本報告では、主に文字資料の分析により、肥後国、特に菊池地域（後の菊池郡域におおむね相当する地域）における豪族の動向を探り、鞠智城が築かれた背景などを考えたい（溝口 2020）。

１．肥後国の豪族

（１）火国の国造

鞠智城が築かれた肥後国は、もともと肥前国とあわせて火国という一つの国をなしていた（『肥前国風土記』総記など）。そこでまずは、火国の国造をとりあげたい。

【史料１】『先代旧事本紀』国造本紀

竺志米多国造。志賀高穴穂朝、息長公同祖稚沼毛二俣命孫、都紀女加定二国造一。

（略）

火国造。瑞籬朝、大分国造同祖志貴多奈彦命児、遅男江命定二賜国造一。

松津国造。難波高津朝御世、物部連祖伊香色雄命孫、金弓連定二賜国造一。

末羅国造。志賀高穴穂朝御世、穂積臣同祖大水口足尼孫、矢田稲吉定二賜国造一。

阿蘇国造。瑞籬朝御世、火国造同祖神八井耳命孫、速瓶玉命定二賜国造一。

葦分国造。纏向日代朝御代、吉備津彦命児、三井根子命定二賜国造一。
天草国造。志賀高穴穂朝御世、神魂命十三世孫、建嶋松命定二賜国造一。
（略）
葛津立国造。志賀高穴穂朝御世、紀直同祖大名草彦命児、若彦命定二賜国造一。

平安時代初期に編纂された『先代旧事本紀』の「国造本紀」には、令制下の肥前・肥後両国に関わる国造として、竺志米多・火・松津・末羅・阿蘇・葦分・天草・葛津立の各国造がみえる。このうち、火・阿蘇・葦北・天草の各国造が、後の肥後国の国造ということになる。

「国造本紀」にみえる系譜に注目すると、火国造と阿蘇国造が同祖関係（同じ先祖から分かれた子孫であるという意識をもつ）にあることがわかる。しかし、阿蘇国造以外は火国造と同祖関係が認められない。かつては、「大国造」のもとに「小国造」が編成されるという「大国造制」なる説も提起されたが、系譜からみる限りでは、火国造と他の国造の間に統属関係があったとはみなしがたい。

ところで、火国造を出した火君氏は、筑前も含めた広い範囲に分布している（第１表）。これについては、本拠地たる八代郡から各地へ進出していったとする見方が強い。しかし、火国各地の豪族が結集して火君氏を構成していたとみることもできよう。

なお、菊池地域は国造氏族の分布から外れており、火国の諸国造と当該地域の関係は明確にはみえてこない。

（２）肥後国の氏族

次に、肥後国の氏族分布を確認したい（第２表・第１図参照）。まず指摘できるのは、「君」のカバネをもつ氏族が多い点である。一定地域の諸氏族が同じカバネを有するという例は、列島各地で認められる。例えば出雲国では、出雲臣氏をはじめ、額田部臣氏や日置部臣氏などの豪族が「臣」のカバネをもつ。こうした状況は、国造など地域の有力な豪族を中心として、それと政治的関係のある豪族たちも同じカバネをもつにいたったものだと考えられている。火国の場合、火君氏のカバネが「君」であったから、それと政治的関係を結んだ豪族たちも同様に「君」のカバネを有したのだという考えが浮かぶかもしれない。ただし、北部九州で最も有力な豪族というべき筑紫君氏のカバネも「君」であることに鑑みれば、それに近い肥後北部の豪族たちも、筑紫君氏との政治的関係にもとづいて「君」のカバネを有していた可能性も考えておくべきだろう。

なお、鞠智城が所在する菊池郡（郷配置は第２図を参照）では、久々智、大伴部、秦人の３氏族を復原することができる。カバネをもつ氏族はみられないが、大伴部や秦人を現地で統率する伴造氏族がいた可能性は十分に想定できるだろう。

２．鞠智城周辺の氏族

（１）久々智氏

鞠智城が築かれた菊池郡に分布が復元できる氏族をとりあげ、その性格を考えたい。

まずは、郡名と同じ「ククチ」のウヂナをもつ久々智氏をとりあげよう。久々智氏は菊

池郡に居住したことを直接に確認することはできないものの、もともと菊池地域を拠点とした氏族とみて問題ない。久々智氏は、９世紀はじめ頃に編纂された『新撰姓氏録』に系譜が掲載されている。

【史料２】『新撰姓氏録』摂津国皇別

高橋朝臣。阿倍朝臣同祖。大彦命之後也。日本紀不レ見。

佐々貴山君。同レ上。

久々智。同レ上。

これによれば、久々智氏は大彦命の後裔という系譜をもっていた。後述するように、筑紫国の筑紫君氏（筑紫国造）も大彦命後裔氏族であり、同祖関係にあたる。また、菊池郡に分布する大伴部氏も大彦命後裔氏族であり、それとも同祖関係にあたる可能性が高い。

（２）大伴部氏

次に、菊池郡子養郷の人として復元できる大伴部氏をとりあげよう。

【史料３】東大寺大仏殿廻廊西地区出土木簡（奈良県教育委員会編 2000。第３図）

・「薬院依仕奉人〈大伴部鳥上　入正月□□〔五日カ〕／大伴部稲依入正月五日〉＝
　＝肥後国菊地郡□〔子カ〕養郷人　『□』」

・「『悲田　悲田院　　充大□不□未［　　］』」

476 × 43 × 4　011 型式

これは東大寺の大仏鋳造に関わる木簡である。同じ土層から出土した木簡は、大仏鋳造が開始された天平 19 年（747）９月から大仏殿が完成した天平勝宝３年（751）頃までのものとみられている（中井・和田 1989）。そして史料３の木簡は、薬院＝施薬院に所属する大伴部鳥上や大伴部稲依が大仏鋳造の場に入るときの通行証か、二人の勤務をチェックするための札であるとみられている（東野 2010）。この木簡により、大伴部鳥上と稲依が菊池郡子養郷に属していたことがわかる。

ここで考えなければならないのは、大伴部の性格である。大伴部には、大伴連氏に連なる系統と、膳臣氏に連なる系統（膳大伴部）があった。菊池郡の大伴部がどちらにあたるかが問題となるが、同じ菊池郡に縁のある久々智氏が大彦命後裔氏族であることを踏まえると、大彦命後裔氏族である膳臣氏に連なる大伴部とみるべきであろう。

（３）菊池地域と筑紫君氏

ここまでの考察によると、菊池郡に分布が復元できる久々智氏・大伴部氏はいずれも大彦命後裔氏族であった。ここで注目すべきは、北部九州の有力豪族である筑紫君氏も大彦命後裔氏族であったことである。

【史料４】『日本書紀』孝元７年２月丁卯（２日）条

立二欝色謎命一為二皇后一。后生二二男一女一。第一曰二大彦命一。第二曰二稚日本根子彦大日日天皇一。第三曰二倭迹迹姫命一。〈一云、天皇母弟少彦男心命也。〉妃伊香色謎命生二彦太忍信命一。次妃河内青玉繋女埴安媛生二武埴安彦命一。兄大彦命、是阿倍臣・膳臣・阿閇臣・狭狭城山君・筑紫国造・越国造・伊賀臣、凡七族之始祖也。彦太忍信命、是武内宿祢之祖父也。

【史料５】『先代旧事本紀』国造本紀

筑紫国造。志賀高穴穂朝御世、阿倍朝臣同祖大彦命五世孫、日道命定二賜国造一。

大彦命後裔氏族は列島各地に広く分布するが、北部九州における大彦命後裔氏族の中心は、筑紫国造＝筑紫君氏である。久々智氏や大伴部氏は、筑紫君氏の勢力下にあったことを背景として、大彦命を「祖」とする系譜（筑紫君氏との同祖関係）を有するに至ったと考えるべきであろう。

肥後国と筑紫君氏の関係を考えるうえで想起されるのは、いわゆる「磐井の乱」が勃発した際、筑紫君磐井が、火・豊二国に勢力を張っていたとされることである（『日本書紀』継体 21 年 6 月甲午〈3 日〉条）。菊池地域は、磐井が勢力を張った火国の具体的な地域の一つにあたるのかもしれない。いずれにせよ、菊池地域に久々智氏や大伴部氏など、筑紫君氏と政治的関係を結んだ集団がいたことが重要である。

なお、菊池川流域には、石製表飾を採用した木柑子フタツカサン古墳（6 世紀第 2 四半期、前方後円墳）や木柑子高塚古墳（6 世紀後半、前方後円墳）が築造された。こうした古墳の被葬者たちは、久々智氏や大伴部氏のような、筑紫君氏と政治的関係を結んだ勢力との関連から理解すべきであろう。

（4）秦人氏

菊池郡に分布する氏族として最後にとりあげるのは秦人氏である。

【史料６】鞠智城跡貯水池跡出土木簡（熊本県教育委員会編 2012。第 4 図）

「秦人忍□〔米カ〕五斗」

134 × 26 × 5　032 型式

これは、秦人忍が負担した米の荷札木簡である。出土した粘土層からは 7 世紀後半～ 8 世紀後半頃に比定される遺物が検出されている（熊本県教育委員会 2012）。この木簡の記載内容について留意されるのは、秦人忍の所属する国・郡・郷（里）などの記載がない点である。このことは、鞠智城が所在する肥後国菊池郡に属する人物からの貢進であったことを示す（佐藤 2014）。つまり秦人忍は、菊池郡の人であった。

次に、菊池郡に秦人氏がいた事情を考えてみたい。秦人というのは、中央の秦氏の傘下にあった渡来系集団である。その出自は多様であり、新羅や加耶などさまざまな地域から渡来してきた人々から構成される。ただし、渡来してきた人々がそのまま秦人に編成されたわけではなかった。秦人とは、もともと畿内の在地豪族や国造に任じられた地方豪族の支配下にあった人民が王権直属の民として割き取られ、秦氏のもとに編成された人々であったとされる（加藤 2009）。だとすれば、菊池郡の秦人につながる渡来人を招来した勢力が問題となってくる。これまでの考察を踏まえると、菊池地域の秦人につながる渡来人を招来した豪族としては、筑紫君氏がもっともふさわしい。

「国造本紀」に収められた伊吉島造の系譜によると、磐井には新羅人の従者がいたらしい。また『日本書紀』によると、磐井は「高麗・百済・新羅・任那」の「貢職船」を誘致していたという（継体 21 年 6 月甲午〈3 日〉条）。筑紫君氏は糟屋など沿岸部の拠点を利用して渡来人を招来しており、その一部が後に秦人に編成されたのであろう。磐井の乱が秦人編成の契機となった可能性も十分に考えられる。

おわりに

以上の考察結果をまとめつつ、鞠智城の成立と地方豪族の関わりをさぐってみたい。

第一に、国造級の豪族からみると、菊池地域はいわば「空白地帯」であった。これまで、有明海沿岸や吉備では６世紀代の有力古墳群を故意に避けて古代山城が選地されており、在地勢力による築城とは考えにくいとの指摘がある（向井 1991）。菊池地域に国造級の豪族がみられないという点は、こうした指摘とも親和的である。ただし、木柑子に築かれた２基の６世紀の前方後円墳の存在は無視できない。菊池地域に豪族がいなかったというわけではない。

第二に、菊池地域は筑紫国造の配下にあった久々智氏や大伴部氏の勢力圏であった。明らかとなっている氏族分布が断片的であるため確実なことはいえないが、かつて筑紫国造の配下にあった有力者が、鞠智城を擁する評の官人に編成された可能性は高いだろう。白村江の敗戦後、特段こうした勢力への牽制が必要になったことは想定しがたい。

こうした勢力と鞠智城築造の関係を考えるとすれば、築城を契機とした倭王権による地方豪族の編成という意義を見いだせるかもしれない。鞠智城の築造にあたって、倭王権―大宰府が、国造を介さず、現地の豪族（評官人）に協力させたとすれば、それによって結果的には倭王権―大宰府による地域社会の掌握が進んだとみられる。つまり、倭王権が国造を介して中小豪族を支配する仕組みから、倭王権が国造を介さずに中小豪族を支配する仕組みへ変化していくなかで、古代山城の造営がそれを促進させる役割を果たしたと考えられる。

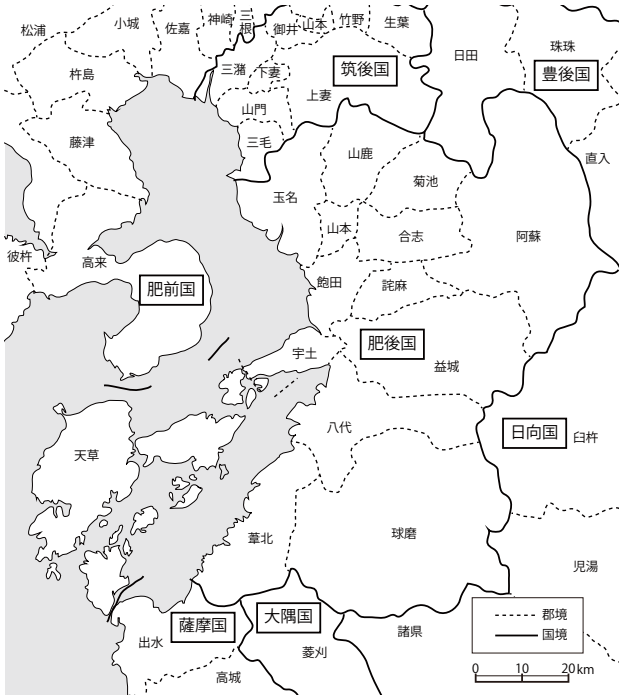
第三に、菊池地域は筑紫国造のもとから倭王権の直接的な配下に編成された秦人が居住する地域であった。秦人は国造などの地方豪族を介さず、中央の王権が直接的に把握していたため、鞠智城の造営に際して、倭王権―大宰府による労働力編成が比較的容易であったと考えられる。また、秦氏は土木・建築技術を有していたことも知られているから、技術的な面から鞠智城の造営に関与した可能性も想定できるだろう。

以上、主に文字資料の分析により、肥後国、特に菊池地域における豪族の動向を探り、鞠智城が築かれた背景などを考えてきた。鞠智城周辺の現地の勢力という観点では、鞠智城の所在地にもともと営まれていた集落遺跡や、鞠智城の南方に営まれた瀬戸口横穴群などの存在も重要である。今後は、こうした集落や墓などの発掘調査成果もふまえ、現地勢力の実態を総合的にとらえていく必要があると思う。

（参考文献）

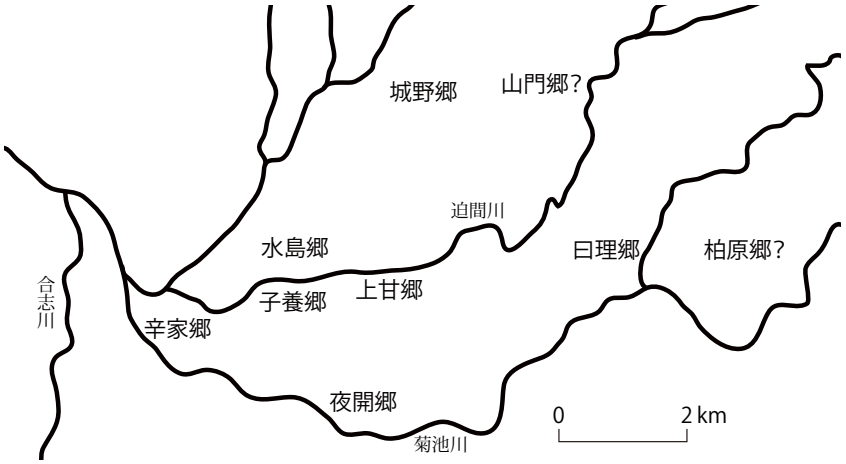
加藤謙吉　2009 『秦氏とその民―渡来氏族の実像―（新装版）』 白水社、初出 1998
熊本県教育委員会編　2012 『鞠智城跡Ⅱ』
佐藤信　2014 「鞠智城の歴史的位置」『鞠智城跡Ⅱ―論考編１―』 熊本県教育委員会
東野治之　2010 「東大寺大仏の造立と木簡」『書の古代史』 岩波書店　初出 1989
中井一夫・和田萃　1989 「奈良・東大寺大仏殿廻廊西地区」『木簡研究』11
奈良県教育委員会編　2000 『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書　発掘調査篇』
東大寺

溝口優樹　2020 「氏族からみた古代肥後の地域社会と鞠智城」『鞠智城と古代社会』8 熊本県教育委員会
向井一雄　1991 「西日本の古代山城遺跡―類型化と編年についての試論―」『古代学研究』125



第１図　肥後国の郡

（島方洸一企画・編集統括『地図でみる西日本の古代』平凡社、2009 年）をもとに作成）



第２図　菊池郡の郷配置

（国土地理院発行 20 万分１地勢図「熊本」〈2005 年測量〉をもとに作成）

第１表　火君氏の分布

地域	人名など	出典	備考
筑紫国	火君等祖〈不知名〉	『播磨国風土記』飾磨郡条	継潮の地名起源説話。「筑紫国」は九州全土を指す可能性あり
筑前国嶋郡川辺里	肥君猪手ほか	大宝2年（702）「筑前国嶋郡川辺里戸籍」（『大日本古文書』1-9～142／『正倉院文書』正集三十八・三十九、続修六）	猪手は大領
筑前国志摩郡	肥公五百麿	承和8年（841）「筑前国牒案」（『平安遺文』第1巻、67号文書／『大宰府市史　古代資料編』史料132）	大領
肥前国養父郡	筑紫火公貞直・筑紫火公貞雄	『続日本後紀』嘉祥元年（848）8月壬辰（6日）条	忠世宿祢を賜姓。左京に移貫
肥前国松浦郡	火君	『日本霊異記』下巻第35縁	
肥後国益城郡	肥公馬長	延暦20年（801）浄水寺「燈樓銘」（豊野町教育委員会2004）	
（肥後国）八代郡	火君健緒鉈	『肥前国風土記』総記など	火国の地名起源および火君氏の祖先伝承
薩摩国（薩摩郡？）	肥君廣龍	天平8年「薩摩国正税帳」（『大日本古文書』2-18頁／『正倉院文書』正集四十三）	主帳
薩摩国出水郡	肥君	天平8年「薩摩国正税帳」（『大日本古文書』2-20頁／『正倉院文書』正集四十三）	大領

第３図　東大寺大仏殿廻廊西地区出土木簡
（奈良県教育委員会編 2000）

（写真）

（実測図）

第４図　鞠智城跡貯水池跡出土木簡
（熊本県教育委員会編 2012）

第２表　肥後国の氏族分布

郡	人名・氏族名	典拠	備考
玉名	日置部	日置郷の郷名から復元	
	日置部公	「日置氏墓誌」（松本1980年など）	権擬少領
山鹿			
山本			
菊池	秦人	鞠智城跡貯水池跡出土木簡（熊本県教育委員会2012）	郡名を記さないことから菊池郡の人と推定される
	大伴部鳥上・大伴部稲依	東大寺大仏殿廻廊西地区出土木簡1761（奈良県教育委員会2000）	子養郷の人。「薬院依仕奉人」としてみえる
阿蘇	阿蘇君	『古事記』神武段など	郡名との一致から推定
	阿蘇直	『異本阿蘇系図』（田中1986）	阿蘇君氏との同族関係から推定
	穴穂部直	『異本阿蘇系図』（田中1986）	阿蘇君氏との同族関係から推定
	宇治部公・宇治部宿祢	『異本阿蘇系図』（田中1986）	阿蘇君氏との同族関係から推定
合志	日下部辰吉	『日本三代実録』貞観18年（876）9月9日癸未条	擬大領
	壬生諸石	『日本書紀』持統10年4月戊戌（27日）条	
	鳥取部	鳥取郷の郷名から復元	
飽田	春日部	『日本書紀』安閑2年5月甲寅（9日）条	「火国春日部屯倉」の所在地として熊本市春日が比定されることから推定
	建部君馬□〔都カ〕	平城宮木簡（『平城宮木簡』1-300）	天平三年。主政
	建部君虫麻呂	天平勝宝6年（754）『瑜伽師地論』巻38奥書（『大日本古文書』25-171頁／石山寺所蔵）	
	建部公弟益	『続日本後紀』承和14年3月丙申朔条	長統朝臣賜姓・左京三条に移貫
	建部公貞雄	『日本三代実録』貞観3年8月21日壬戌条	大領
	私部	私部郷の郷名から復元	
詫麻	津守部（？）	津守郷の郷名から復元	
益城	山稲主	『続日本紀』宝亀元年（770）10月己丑朔条	旧の山部
	肥公馬長	延暦20年（801）浄水寺「燈樓銘」（豊野町教育委員会2004」）	
	真上日乙	延暦20年（801）浄水寺「燈樓銘」（熊本県豊野町教育委員会2004）	真上＝真髪部はもと白髪部
	大伴君熊凝	『万葉集』巻5-885	天平3年（731）相撲使の従人として上京
	当麻部（？）	当麻郷の郷名から復元	
	宅部	宅部郷の郷名から復元	
	益木采女	二条大路木簡（『平城宮発掘調査出土木簡概報』31-20下(248)）	
宇土	額田部君得万呂・額田部真嶋	天平勝宝2年「仕丁送文」（『大日本古文書』25-145頁／正倉院丹裏文書第94号）	大宅郷
八代	火君健緒鉈	『肥前国風土記』総記、『釈日本紀』所引「肥後国風土記」逸文	火国の地名起源および火君氏の祖先伝承
	火国造	「国造本紀」	八代郡火邑の地名から推定
	高分部福那理	『続日本紀』宝亀3年（772）10月戊午（11日）条	
	豊服広公	『日本霊異記』下巻第19縁	豊服郷の人。宝亀2年の説話
天草	天草国造	「国造本紀」	郡名との一致から推定
葦北	火葦北国造刑部靫部阿利斯登	『日本書紀』敏達12年10月是歳条	
	葦分国造	「国造本紀」	郡名との一致から推定
	日奉部広主売	『続日本紀』宝亀元年（770）10月己丑朔条	『続日本紀』宝亀3年10月丁酉（9日）条では「日奉公広主売女」とみえる
	家部嶋吉	『続日本紀』宝亀3年（772）10月戊午（11日）条	
	刑部広瀬女	『続日本紀』神護景雲2年（768）9月辛巳（11日）条	
	他田継道	『続日本後紀』天長10年（833）3月丙申（9日）条	少領
	真髪部福益	『続日本後紀』天長10年（833）3月丙申（9日）条	真髪部はもと白髪部
	大伴部	伴郷の郷名から復元	
球磨	久米部	久米郷の郷名から復元	

(MEMO)

鞠智城跡航空写真 (南西から）

菊池川流域の古墳時代・古代の遺跡

亀田　学（歴史公園鞠智城・温故創生館）

はじめに

菊池川流域の古墳時代から９世紀後半頃までの遺跡の状況から鞠智城との関係を考える。

菊池川下流域は、有明海側（行末川、菊池川の有明海側）、玉名平野南部（玉名市、岱明町）、玉名平野北部（和水町）、菊池川中流域は、菊鹿盆地西側（岩野川流域他）菊鹿盆地東部（内田川流域他）、菊池川上流域右岸（木野川流域・菊池川上流域・迫間川流域）、菊池川上流域、合志川中流域、合志川上流域までを含めるものとする。（図１）鞠智城が何のために菊池郡木野に営まれ、大野城や基肄城のように９世紀後半まで機能しているのかを考えてみたい。

１. 菊池川流域の古墳

（１）前期古墳の分布（図１・８）

菊池川中流域の岩野川下流域に竪穴式石室構造を持つ県北最古の竜王山古墳に竪穴式石室が築造される。その後、菊池川下流域では、壺形埴輪や古式の舟形石棺を主体部とする古墳が出現する。菊池川下流域の有明海側に分布する約 85m の前方後円墳である藤光寺古墳や行末川流域の全長約 78m で舟形石棺を主体部とする院塚古墳、玉名平野北部の菊池川下流域に分布する約 59m の前方後円墳の山下古墳等である。玉名平野東側でも壺形埴輪が樹立され、全長 100m を超える規模の前方後円墳である天水大塚古墳が築かれる。

このように、まず畿内系の葬送様式が菊池川中流域にまず採用され、九州系の舟形石棺が菊池川下流域で採用される。

（２）中期古墳・舟形・家形石棺の分布（図４・２・３）

古墳時代中期の菊池川流域の主要な古墳には、舟形石棺や棺身が組み合わせになる家形石棺を主体部とするものが多い。

屋根形棺蓋で石枕を造り出さない舟形石棺（北肥後Ⅰ型）は、菊池川中・下流域にみられる。高木恭二氏の研究によれば屋根形棺蓋の舟形石棺は、福岡県みやま市石神山古墳の小棺に採用されているなど筑後地方にその分布が見られる。このことから筑後地域との密接な関係がうかがえる。

それに対し、屋根形の蓋を持ち、さらに石枕を造り出す舟形石棺（北肥後Ⅱ型）は、菊池川上流域の一部に分布しており、菊池川中･下流域と菊池川上流域の地域差が見られる。

台（うてな）台地にも径約 27m の舟形石棺を主体部とする北上原古墳がある。舟形石棺が主体部であり、北肥後Ⅰ型である。鞠智城跡の北西に位置する灰塚古墳は、少なくとも径 15m 以上の円墳で、葺石を有する。主体部は粘土郭を持つ石蓋土坑墓で、舟形の蓋

の形状である。また、割竹形木棺と推定できる粘土郭で、畿内型の古墳と在地の舟形石棺を融合されたものとも考えられる。舟形石棺とは言えないが、灰塚古墳の棺蓋の特徴は、肥後の舟形石棺の東端に位置すると考えて良いと思われる。

玉名平野北部にも径約 22m の京塚古墳があり、周辺から凝灰岩製舟形石棺が出土していたことから舟形石棺を主体部とする古墳であると考えられている。埴輪や鈴付高杯などの初期須恵器が出土している。径 13.5m の円墳の竈門寺原 1 号墳は、その棺痕跡から妻入（横口式）家形石棺で初期須恵器の樽形瓹、提瓶が出土している。全長約 62m の江田船山古墳の主体部は妻入（横口式）家形石棺である。

舟形石棺を主体部とする熊本平野北部の経塚古墳や合志川流域の竈門寺原 1 号墳や妻入（横口式）家形石棺を主体部とする古墳に初期須恵器等渡来系遺物が副葬されている。合志川流域の石川山古墳群 9 号墳は家形石棺で内湾鏡板付轡を持つものである。内湾鏡板付轡は f 字形鏡板付杏葉に次ぐもので、渡来系遺物と考えられる。久米若宮古墳は、円墳で家形石棺から方格八乳鏡、剣・鉄鉾・辻金具・轡・鉄鏃等多彩な遺物が出土している。菊池川流域の古墳には、舟形・家形石棺を共通の棺型式としながら、玉名平野北部および合志川流域は渡来系遺物が多く出土するという特徴を持つ。

このように、舟形石棺・家形石棺は、前方後円墳や大形円墳から墳丘規模の小さい古墳にも採用されていることから、有力な首長だけでなく、それに次ぐ階層の有力者の埋葬型式にも採用されたと考えられる。合志川流域や玉名平野北部に勢力をもつ首長を周りに従えながら、おそらくは菊池川中流域の岩原台地に造られた岩原双子塚古墳（全長 100m を超える前方後円墳）には、舟形石棺を主体部にしていたと考えられる。その周辺の方保田周辺にも前方後円墳や大形円墳や舟形石棺を埋葬する古墳が分布する状況で岩原古墳の首長を支えた首長層もしくは有力者と考えられる。

（３）武器・武具出土古墳の分布について

①鋲留の甲冑（図１・２）

熊本県で鋲留の甲冑が出土しているのは、菊池川流域、合志川流域、緑川流域の石ノ室古墳、天草北部のカミノハナ１・３号墳等に限られる。玉名平野南部の伝左山古墳、玉名平野北部の江田船山古墳、合志川中流域のマロ塚古墳、上生上ノ原 4 号墳等であり、菊池川中流域では認められない。

②武器武具の装飾古墳について（図２）

菊池川中流域には、鞆の浮彫をもつ横穴が多い。鍋田８・12・14・21・27・49 号横穴、長岩 41・52• １０８号横穴等である。また盾形の浮かし彫りも鍋田 8・12 号横穴鍋田 8・27 号横穴等に分布する。

（４）埴輪・石製表飾の分布

①埴輪の分布（図７・３）

前期では、菊池川下流域の院塚古墳、天水大塚古墳、小塚古墳で、壺形埴輪（壺形土器）が出土している。県内最大級の円墳の慈恩寺経塚古墳でも壺形埴輪が円筒埴輪と共存している。

また、県内で壺形埴輪が樹立されている古墳は、県内では、全長 100m を超える前方後円墳の長目塚古墳を含む中通古墳群である。（長目塚、上鞍掛 A・B、鞍掛塚 A、車塚 A、勝負塚の各古墳で円筒埴輪）。

前期から中期初頭までは、玉名平野有明海側、阿蘇地域の他合志川下流域ではあるが、菊鹿盆地の南側に壺形埴輪という初期の埴輪文化が広まっていたことは注目に値する。

また５世紀の埴輪の分布は、八代海沿岸の古墳（上天草市カミノハナ古墳群や松橋大塚古墳。前田 A 遺跡）や長目塚古墳群以外では、菊池川流域に集中する。B 種ヨコハケ（静止しながら調整する横方向の板を使った調整）は京塚古墳や虚空蔵塚古墳の一部と、金屋塚古墳朝顔形埴輪に認められる。

また、岸本圭氏の研究によれば八女市立山山２号窯で焼成された埴輪が樹立された釘崎２号墳の埴輪と金屋塚古墳の埴輪が類似しており、押圧技法（タガをつける際に粘土を押しつぶしたような跡が残る）が初見する埴輪の初源とされている。菊池川中流域西部の６世紀前半の中村双子塚古墳・臼塚古墳・チブサン古墳は岸本圭氏の分析により、底部径や直線的に開く形態の類似性が指摘されている。

押圧技法は金屋塚古墳のほか、塚坊主古墳･チブサン古墳で確認される。筑後地方では、釘崎２号墳の他、鶴見山古墳・善象塚古墳（八女市）、欠塚（筑後市）、岡寺古墳・庚申堂塚古墳（鳥栖市）等で認められる。塚坊主古墳は、断続ナデ技法（タガをつける際に斜め上方にナデで付与する技法）も用いられている。筑後地方では、岩戸山古墳・乗場古墳、立山山８号墳（八女市）、権現塚古墳（久留米市）でもみられる。

以上のことから５世紀後半から６世紀前半には、筑後地方との関係が看取される。

②石製表飾（図６・３）

菊池川流域の石製表飾は、玉名平野北側の清原台地から出土した短甲、腰掛、家、刀形石製品、菊池川中流域の岩野川流域の臼塚古墳の短甲、チブサン古墳の石人がある。

菊鹿盆地東側には、木柑子フタツカサン古墳の武装石人、木柑子高塚古墳の石人、石製蓋２である。肥後では、外に三の宮古墳の武装石人がある。

これらの石製表飾の分布は、前方後円墳もしくは、古墳群に前方後円墳を含む系譜の古墳に営まれ、在地の有力な首長によって樹立される。古墳時代中期後半から後期前半にかけて菊池川下流域玉名平野北部、菊池川中流域の岩の川流域、菊池川中流域の菊鹿盆地に在地の有力首長が分布していることは、円筒埴輪の分布域と重なる点で示唆的である。

そのうち、木柑子高塚古墳は、岩戸山古墳と同様に石人や短甲形のものと器材形の石人が共伴している事例で現段階では珍しい。白川下流域右岸の富ノ尾古墳群に石人があるほかは、それより南の緑川流域の塚原古墳群（石ノ室古墳（笠形石製品）、北原１号墳（盾形石製品））、野津古墳群（天堤古墳　笠形石製品）、姫ノ城古墳（笠６、靫２、盾６）、天

草の竹島３号墳（武器形石製品）などでは、武器や祭祀具の石製表飾が見られる。
木柑子フタツカサン古墳は両者の中間に位置するあり方を呈している。石人の分布の肥後の東端と言える。また、周溝が２重に回り、石製表飾（石人）を持つ古墳に日田市天満２号墳がある。このことは、東側の交通路との交流を示唆するものとして注目される。

（５）装飾古墳（図１・２・３）
菊池川地域で石室内への装飾技法が採用されるのは６世紀前半であり、八代から不知火海沿岸の天草地域、宇土半島から熊本市域を経てようやく広まっている。
菊池川下流域の玉名平野北部の塚坊主古墳、中流域のチブサン古墳等が初例であり、菱形文から三角文へそして下流域では、６世紀中葉の永安寺東古墳で馬、中流域の臼塚古墳では人物が描かれている。
横穴墓でも横穴式石室墓と時期を同じくして変遷するが、横穴式石室を石室構造に持つ装飾古墳とやや離れた場所、例えば、玉名平野北部の塚坊主古墳が築造された時期には、石貫や南関の今村岩の下横穴墓に装飾が描かれるというように近接しているが小地域が分かれているような傾向がみられる。
また、中流域に位置する菊池川水系岩の川下流地域のチブサン古墳や臼塚古墳に装飾が採用される時期には、菊鹿盆地の西側の御宇田台地の付城横穴群に装飾が施される。横穴墓でも複室墳や装飾文の有無など構造の違いから階層が存在し、さらに横穴式石室と横穴墓においても階層の違いがみられる。
また、臼塚古墳では幾何学文と具象文の共存がみられる。また、蔵富士　寛氏は筑後平野では６世紀前半に同心円文や・三角文とともに具象文が描かれ、石屋形の影響を受けた石棚等が菊池川や熊本平野北部地域から筑後川流域に伝播したものと指摘する。

（６）特殊遺物の分布
①垂飾付耳飾（図９・２）
菊池川流域で韓半島系の垂飾付耳飾が出土するのは江田船山古墳、伝佐山古墳、大坊古墳の３例である。高田貫太氏によれば、大坊古墳の一つは、大伽耶系でひとつは、百済系である。同様に江田船山古墳の１つは、百済系、もう一つは、大伽耶系とされている。福岡県域では玄界灘周辺に大伽耶系の耳飾が分布する。不知火海沿岸の野津古墳群で大伽耶系の垂飾付耳飾が出土し、菊池川流域では、大伽耶系･百済系共に存在していることから、環不知火海沿岸かもしくは有明海や玄界灘から筑後を経由して伝わった可能性が考えられる。このように菊池川下流域において半島系の遺物が多い点は注目に価する。
②初期須恵器の分布（図１・2・12）
菊池川下流域の玉名平野北岸では、江田船山古墳に百済系と考えられる韓式系土器が含まれることは有名である。径約 22m の京塚古墳周辺で鈴付き高杯や子持ち壺が出土している。
また、やや上流の径約 33m の竈門寺原古墳では、透かしが施された樽形瓲が出土している。このように菊池川下流域に渡来系遺物が顕著にみられる。
また、合志川上流域の菊池市森北で把手付椀が出土している。熊本県では荒尾市の野原

９号墳、熊本市稲荷山古墳で出土している小隈窯跡群周辺の池の上墳墓群・小寺墳墓群等筑後の古墳、吉武高木遺跡群や有田遺跡等早良平野、対馬等から出土しているものである。朝倉窯跡との関係はもちろん、韓半島との関係も示唆される遺物である。

③貝製品　（図 10）

垂飾付耳飾の分布と類似した傾向を示す。古墳時代中期には貝釧とイモガイ製馬具については、伝左山古墳などで出土したほかは、県南部の田川内甲古墳、大鼠蔵山１号石棺など中期でも後半の特徴をもつ石障系の石室に見られる。西迫間横穴群と瀬戸口横穴群、湯の口横穴群等菊池川中流域の横穴群から出土している。特に武器や馬具を多数出土する横穴墓と推定でき、地域首長に関わる軍事を司る人々が埋葬されている可能性が高い。

（７）　横穴式石室の種類と分布

①各種横穴式石室の分布（図３）

菊池川中流域菊鹿盆地西側には、全長約 65m で３段築成、葺石をもつ銭亀塚古墳（集成５期）が営まれる。この古墳は､石障系の石室構造をもち長方形プランを有するもので、割石積みの石室で初期横穴式石室と考えられる。幅 2.5m で、玄室と羨道に段差をもつ。前期の竜王山古墳群につながる首長墓系譜の古墳である。荒尾市の別当塚東古墳等の系統で、九州北部地域の影響がみられるものである。

②竪穴系横口式石室（図２）

菊池川中流域菊鹿盆地北側では、津袋古墳群中に周囲が削平されて径約 7.2m しか残存していないが、竪穴系横口式石室と推定されている朱塚古墳がある。この型式の石室は菊池川下流の城ケ辻古墳群中の７号墳に採用されている。外には、上天草市の樋合島の瀬崎古墳に採用されている。有明海周辺からの伝播と考えられる。墳丘規模は大きくないが､城ヶ辻７号墳では馬具や大刀、長頸鏃が多数検出され、墳丘を一部共有する６号墳では、内湾形（楕円系）轡が出土し、垂飾付耳飾の破片も見られることから、軍事に携わる有力者に採用された石室形式と考えたい。

中期から後期初めにかけて、有明海からの系譜の異なる文化が中流域まで伝わっていることが伺える。

③石屋形の分布（図５）

宇野慎敏氏は、石屋形を分類し、家形に加工していない自然石状の板石の屋根石を有するものをＡ類､屋根石が家形を呈するものをＢとして､両者の分布の偏重を指摘している。

菊池川下流域の弁財天古墳、大坊古墳、永安寺東・西古墳、馬出古墳、塚坊主古墳、中流域のオブサン古墳、チブサン古墳、臼塚古墳、弁慶ケ穴古墳、馬塚古墳などにＢ類の屋根形の石屋形が分布する。

宇土半島基部の国越古墳、宇賀岳古墳、中ノ城古墳にもみられる。Ａ類の分布は、白川下流域にみられる。

宇野慎敏氏はこれらの分布から屋根形のＢ類が主要古墳に、Ａ類はＢ類よりやや低い在地有力層に採用された型式とみている。ただし、筑後地域から筑前にかけて分布するＡ

類の古墳は、弘化谷古墳等規模が 40m を超える円墳や桂川王塚古墳（嘉穂郡桂川町）等で有力な首長層にも採用されていることから地域間のネットワークの差とみられ、白川流域との首長とのつながりを示すものと考えられる。B 類も童男山 1 号墳、東光寺剣塚古墳（福岡市博多区）、鶴見塚古墳（糟屋郡粕屋町）などの筑前地域の全長 80m を超える前方後円墳に採用されている。宇土半島基部、菊池川流域と北部九州のつながりを示している。

菊池川中流域菊鹿盆地東部の袈裟尾高塚古墳が凝灰岩の加工しやすい石材をしながら石屋形の屋根が平天井（A 類）であることは示唆的である。すなわち、菊池川流域の中・下流地域の石屋形を採用せず、他地方からの文化が採用されたと考える。埴輪が樹立されず靫を浮き彫りにした石製表飾を楣石等に採用する点等がそのことを示していると言えよう。

④切石積石室の分布（図 11・２）

切石積複室構造横穴式石室の代表例は、菊池川下流域の江田穴観音古墳である。このように巨大な凝灰岩の切石を使った古墳が分布する。菊池川流域より北では、南関の八角目古墳群や萩ノ尾古墳があげられる。菊池川中流域では弁慶ヶ穴古墳や合志川流域では鬼のいわや古墳、石川山 4 号墳があげられる。注目すべきは、阿蘇の下御倉古墳と上御倉古墳である。高木恭二氏が指摘するように情報や石材移動などが指摘されている。この型式の石室が菊池川上流域で見つかっていないことも留意が必要であろう。

（８）横穴墓の分布（図１・２・３）

熊本県域では、290 箇所以上の横穴群の存在が知れており、菊池川流域では 130 以上が分布し、総数 3750 基以上とされているが、そのうち半数以上が菊池川流域に分布する。(「中九州の横穴」松本健郎）横穴墓の分布は、阿蘇溶結凝灰岩の分布地域と重なり、菊鹿盆地周辺部と玉名平野の北・東縁部に分布の中心がある、

６世紀前半頃、菊池川中流域にチブサン古墳や中村双子塚古墳や塚坊主古墳などの主要な前方後円墳が築造される。また、同地域に付城横穴群等造営される。古式の横穴墓と考えられ、古い須恵器も出土している。横穴式石室と横穴式石室が 1 世紀以上にわたって共存していることが理解されよう。

最古の装飾横穴墓である付城 57 号・72 号は、墓室の奥に切石を持ち込んで石屋形を作る。装飾文様には×印や円文・連続三角文が施される。初期には武具（靫・盾・弓・剣・刀子）、後に楽器の琴やゴンドラの舟、馬、人物などの装飾文様が見られ、葬送儀礼に伴うものと考えられる。

菊池川下流域の伝左山古墳において横穴式石室に複室が採用されると菊池川下流域の石貫ナギノ横穴群、菊池川中流域には、城横穴群、付城横穴群、岩原横穴群、桜の上横穴群、湯の口横穴 129 号などに複室構造をもつ横穴墓が造られる。複室構造を持つ横穴墓は、菊池川中から下流地域で顕著で、装飾古墳も多く、長岩 109 号盾、岩原Ｉ－３２号・Ｖ－６－６号の靫などのように武器を模した彫刻が多い。装飾の有無、複室等有無により階層が分かれていたことを示すと考えられる。いずれも、６世紀後半（TK43 から 209 型式併行期からの築造と考えられるが、７世紀まで追葬されることが多い。

鞠智城に近い瀬戸口横穴群でも６世紀後半から７世紀後半以降の追葬がみられる。拠点ごとに横穴式石室を主体部とする首長墓が営まれている時期にそれに次ぐ有力者層も横穴墓に埋葬されていると推定できる。特に中から上流域に分布が多く、地域的な特色が指摘されよう。

鞠智城の周辺には、南側に山田横穴群、樋画之口横穴群、大井横穴群、堀切横穴群等、北西側にスズメ迫横穴群（９基）が分布し、これらの横穴墓群には７世紀代まで埋葬された可能性が高い。

横穴式石室は西側の木野川流域に頭合古墳、北側に黄金塚古墳、北西側に徳塚古墳・銭亀塚古墳、等があり、巨石を用いた横穴式石室を含めて終末期と推定される古墳が集中している。

２.菊池川流域の古墳時代の集落(図１・２・３、表1)

菊池川下流域の玉名平野南部の古墳時代集落は、前期から柳町遺跡、両迫間日渡遺跡、玉名平野条里跡で、生産遺跡とともに集落が営まれている。低湿地に囲まれた微高地に竪穴建物・井戸・溝等の遺構で構成される集落で平地式住居も存在した可能性がある。古墳時代前半～中期中葉までの土坑ないし竪穴建物もある。大溝からは、古墳時代後期（６世紀中葉）の土師器・須恵器も数点出土しており、その時期の水田面も周辺でみつかっていることから古墳時代後期まで集落が営まれたことが判明している。玉名平野南部東側では、塚原遺跡が営まれる。山下遺跡では前期前葉の土器群の出土しており、前期の院塚、山下古墳等の首長墓が玉名平野南部の拠点集落を治めていたと考えられる。やや南側の菊池川支流の木の葉川流域の稲佐津留遺跡では、内行花文鏡や四乳細鳥文鏡、山陰系の甑や甕が出土している。北の崎遺跡でも、前期から中期前葉までの竪穴建物、６世紀後半の竈付竪穴建物を検出している。後に稲佐廃寺が造営される地域である。

山田松尾平遺跡は、低丘陵の突端に営まれた集落であり、古墳墳時代前期から中期初頭までの竪穴建物で、周辺の蓮華遺跡では、６世紀中葉から後半の竈付竪穴建物の集落が検出されている。

背後に古代の蛇ケ谷製鉄跡や須恵器窯跡の保多地窯跡群が営まれるところである。

菊池川中流域で拠点集落となるのは、菊鹿盆地西部の方保田東原遺跡である。東側の藤井前田遺跡で採集された土器群は中期的な様相を示すことから、中期初頭まで集落が継続されていたと考えられる。

菊池川上流域の支流の河原川流域の低位段丘面に存在する東鶴遺跡から古墳時代前期末から中期中葉の炉跡を持つ竪穴建物４基・溝１条、土坑６基を検出している。菊池市赤星地区の東側の藤田上原遺跡では、古墳時代中期終りから後期初めの須恵器が出土している。鞠智城内の上原地区・長者原地区西部に古墳時代後期の集落が営まれる。北東側の樋ノ口遺跡でも古墳時代の遺物が出土しており、古墳が存在する周辺に集落も営まれていると考えられる。

合志川流域の平町遺跡は、中期前葉から後葉にかけて竈付の竪穴建物からなる集落である。出土遺物には小形丸底系土器や韓式土器と考えられる外面に格子叩きが残存する把手

付鍋もしくは甑がある。すぐ近くの合志川上流の藤巻遺跡では、竈を持つ竪穴建物や溝が検出されている。高杯小形丸底類は及び高杯が多数出土している。この地域は、熊本市城南地域にある迎原西遺跡と同様に熊本県では竈が早く採用された地域である。上流の森北地区では須恵器把手付鉢が出土していることから、渡来人が関与する地域と考えられる。

合志川中流域支流の小野川流域の横山古墳や鬼のいわや古墳周辺の石川遺跡で、後期の竈付竪穴建物や土坑が検出されている。6 世紀前葉から後葉が中心であるが、須恵器を伴わない時期の 5 世紀後半から出現するようである。彩色を施した須恵器模倣杯を多く含む。上流域の篠原遺跡で 6 世紀中葉から後葉の竈付き竪穴建物群とともに製塩土器が出土している。

３. 菊池川流域の古墳文化

菊池川流域の古墳文化は、前期には、下流域の山下古墳、天水大塚古墳、院塚古墳と在地の九州型の舟形石棺を持つ前方後円墳が営まれるが、中流域の支流岩野川流域に竪穴式石室を持つ竜王山古墳が営まれる。菊池川中流域が大和政権にとっても重要な地域であったことが伺える。

中期になると屋根天井形の舟形石棺は、菊池川中・下流域から筑後まで分布しており、筑後地方との関係が密接であったこと窺える。

菊池川中流域では、初期横穴式石室の銭亀塚古墳や岩原古墳群等へ続く勢力は、菊池川下流域の勢力と拮抗していたと考えられる。合志川流域はそれらに次ぐ勢力が中期以降も続く有力な地域であり続け、高熊古墳・マロ塚古墳、上生上ノ原 4 号墳等では甲冑等の武器・武具や馬具等の出土がみられる。また埴輪の分布を見ると菊池川下流域玉名平野北部の清原台地の古墳群（京塚古墳、虚空蔵塚古墳、江田船山古墳、塚坊主古墳）と並んで中流域の岩野川流域から菊鹿盆地西部にかけての金屋塚古墳・臼塚古墳・チブサン古墳、中村双子塚古墳等が主要な分布地域である。その中でも特に中村双子塚は多様な埴輪群が周溝から出土しており、畿内の埴輪文化の影響がみられる。

古墳時代前期の菊池川下流域の集落は、柳町遺跡等玉名平野の微高地上から小河川の近くの低位段丘に営まれている。玉名平野東側の塚原遺跡でも大規模な集落が営まれ、中期の石棺系石室が営まれていることから中期まで集落が存在していたと考えられる。中期は、蓮華遺跡でみられるが、様相ははっきりしない。後期も前期以来の集落から、少量であるが、土器の出土がみられ、集落が営まれている様子が窺える。隣接地域に集落が展開していった可能性が高い。

菊池川中流域では、菊池川方保田東原遺跡を中心に展開している。いずれも前期（弥生時代終末）から継続して中期前半まで拠点集落として継続していた可能性が高い。御宇田台地で後期の集落がある程度である。石棺群等も河川の近くにあることから、中期から小規模な集落が微高地に営まれていた可能性が高い。

合志川流域の平町遺跡や藤巻遺跡は、前期末から中期前半にかけての集落であり、西側 2 ～ 3km のところに家形石棺を持つ久米若宮古墳等が所在する。小野川流域では前期には北無田遺跡、中期以降は石川遺跡で大規模な集落が営まれている。特に中期から合志川

流域に勢力を持った首長が存在し始めることを表している。合志川流域の古墳から甲冑等の武器・武具の出土が多いことが関係している。

後期については、菊池川中・下流域では、前期からの集落に土器の出土がみられ、集落が継続していることが窺える。菊池川上流域や合志川流域では、鞠智城の古墳時代集落等がやや高い台地上に営まれてきている様子が窺える。上流域の森北出土に把手付鉢等渡来系の遺物が出土していることから小規模な集落が点在して広がって、ネットワークを構築していったと考えられる。古代に続く交通路に近接する集落周辺に後期の集落が営まれている様子がうかがえる。

後期の埴輪については、菊池川中流域の金屋塚古墳に押圧技法が見られ、筑後平野の古墳にも押圧技法が採用されていることや家形の石屋形が菊池川流域から筑後平野に多く分布していること、銭亀塚古墳等北の部九州系の初期横穴式室や竪穴系横口式石室が玉名平野や菊鹿盆地に分布することは、北部九州もしくは有明海ルートでの朝鮮半島からの影響等が窺える。

菊池川中流域の横穴式石室と横穴の変遷は連動し、複室の横穴も見られる。
菊池川上流域の伝左山古墳等で始まった複室墳は、菊池川中流域で複室の面積が増大し、他地域へ複室墳が波及したと考えられ、中流域はその拠点となったと考えられる。さらに、菊池川中流域に顕著な盾や靫等・弓・剣、刀子等の装飾古墳に描かれた武具と楽器の琴、ゴンドラの舟、馬、人等は葬送儀礼を考える上でも重要だが、北部九州等他地域に影響を与えたものと考えられ、文化の起点になっていたと考えられる。

菊池川上流域は、木柑子フタツカサンや木柑子高塚古墳、袈裟尾高塚古墳等が6世紀前葉・中葉に営まれるが、埴輪を持たない可能性が高く、石屋形も形式も異なる等在地の菊池川中・下流勢力よりも規制をうけた勢力であり、それ以降装飾古墳や切石積みの石室を持てなかった勢力ではないかと考える。切石積みの石室が阿蘇地域に存在することも併せて、交通路の交差点で交易の要衝の地域と考えられる。そのことは、木柑子フタツカサン古墳は、北の石人、南の武器・祭祀具の中間に位置するあり方を呈し、
木柑子高塚古墳と日田市天満2号墳は周溝が2重に回り、石製表飾（石人）を持つという類似性からも窺えよう。

こうした勢力に影響を受けながら、鞠智城の後期の集落は営まれていると考え、終末期の切石積石室は築造できなかったが、後期から終末期にかけての横穴式石室や横穴を築造した集団が鞠智城周辺に居住していたことが窺える。

4.菊池川流域の古代の集落・官衙関連遺跡・寺跡(図12・3、表2)

菊池川下流域の立願寺廃寺は7世紀後半から建立で法起寺式伽藍配置と推定されている。軒瓦は、単弁の蓮華文に重弧文のセットである。鴟尾が伴う。瓦は6型式に分類され、平安時代前期まで継続する。土器からも同様である。鬼面文瓦も持つ。8世紀代の軒瓦は老司式軒瓦で、鬼瓦も大宰府式に類似する。郡家跡も調査されており、3間×4間総柱の掘立柱建物を検出し、湊に関わる遺構も検出されている。

稲荷山古墳の墳丘からも単弁蓮華文等立願寺系瓦が出土している。

菊池川下流域は小岱山の製鉄跡、三ノ岳製鉄遺跡群等近くにあり、鉄は、重要な資源である。

菊池川下流に流れ込む木の葉川流域でには、稲佐廃寺がある。塔・金堂・中門等の配置（法起寺式伽藍配置）がわかり、塔心礎が残存する。奈良時代末期から平安時代で新羅系（立願寺廃寺終末期）の瓦が使用されている。９世紀後半を中心とする時期と考えられる。

菊池川下流域では、玉名平野の低湿地に囲まれた微高地上に、古墳時代から継続して柳町遺跡・両迫間日渡遺跡・玉名平野条里跡等に集落が営まれる。帯金状の金具・石帯も出土している。また、敷粗朶（しきそだ）技法を使った幅 4m 以上の大畦は、8 世紀末から 9 世紀前半のものであり、その方向から条里制に関わる大畔畔と推定されており、奈良時代終末から平安時代前期から本格的に条里が施行されたと考えられる。上小田宮の前遺跡は、7 世紀後半から 9 世紀にかけての掘立柱建物や井戸を検出している。建物は 3 間× 4 間の総柱建物、7 世紀後半から 8 世紀代には道路状遺構を検出している。丘陵の突端に営まれている山田松尾平遺跡は 8 世紀中葉から 9 世紀前葉にかけての竪穴建物・土坑が検出されている。製鉄関連の炉跡・炉壁等が出土しており、鉄滓が出土している。付近には蛇ヶ谷遺跡（製鉄炉等）があり、須恵器窯跡や製鉄関連の集落と考えられる。

稲佐廃寺が近い木の葉川流域の北の崎遺跡は、8 世紀後半から 9 世紀前半までの集落である。

菊池川中流域の山鹿郡衙に比定されている桜町遺跡の詳細は不明だが、須恵器・土師器が表採されており、8 世紀後半以前から営まれていたと考えられる。北西 4km 程の岩野川流域の梅迫遺跡では、８世紀後半の竈付の竪穴建物が数軒研修されており、硯に転用された須恵器杯蓋や円面硯が出土している。

周辺には方保田東原遺跡や駄の原遺跡等の集落が立地する。方保田東原遺跡にほど近い山鹿郡寺と推定される中村廃寺では。９世紀代の前半から後半の軒瓦や鬼瓦、鉄滓、炉壁も出土している。製鉄遺跡など生産遺跡を周辺にもつと考えられる。

菊池川中流域の菊鹿盆地東部の御宇田台地に広がる御宇田遺跡群は、主に 7 世紀から 9 世紀にかけての集落及び官衙関連遺跡と考えられる。越州窯青磁、石帯、円面硯が出土している。墨書土器は「日」の字が見えることから、日置氏との関わりを指摘する考えもある。三玉地区には蒲生山を背後に不動岩がそびえ、東に凡未導寺跡があり、凸面縄目叩き、凹面布目叩きの平瓦等が多量に散布するが、方保田東原遺跡周辺が古墳時代に引き続き菊池川中流域の拠点集落になっていたか可能性があると考えている。

菊池川上流域の西寺遺跡は、菊池郡衙推定地で瓦等が散布している地点で周辺に土塁が見られ、４町２町四方を取り囲む土塁があったとされている。土塁外側まで瓦が散布している点や中世の屋敷に利用されていた可能性もあるものの、南西の南園遺跡に多数遺物が散布していることから考え、菊池郡衙があった可能性が高い。土塁の一部が古代にさかのぼれば、渡来系の技術で構築された可能性もある。さらに東側の隈府地域には、礎石の総柱を持つ 9 世紀後半頃と推定される正観時礎石群がある。寺跡とも見られるが、菊池郡衙の移転先の可能性も指摘される。隈府地域にも 9 世紀代には官衙関連施設があった可能性が高い。鞠智城との距離も近くなり、相互の連携した機能も考えられよう。

南側の赤星水溜遺跡では越州窯青磁が２点出土している。赤星石道遺跡では掘立柱建物

群が検出されている。9 世紀前葉から中葉を中心とする時期で、2 間× 3 間の総柱建物 4 棟、側柱建物は、東西棟、南北棟が存在する。土器が廃棄された土坑が 2 基あり、杙が多数出土しており、金属器模倣杯や長頸壺等が出土している。耳杯（皿）や墨書土器「依麻ロ（呂）？」が出土している。越州窯青磁碗、緑釉陶器椀等も出土していることから官衙関連遺跡の可能性がある。1 点 7 世紀後半の杯蓋も出土している。

鞠智城跡の東南東の袈裟尾の竹ノ上原遺跡では、8 世紀後葉以前の竪穴建物が 5 軒以上検出されている。 また、7 世紀後半にさかのぼる資料も表採されており、土器の状況から見て、その時期の集落が存在する。特殊な遺物としては、製塩土器が出土しており、塩が運ばれていたことが判明した。

うてな台地のうてな遺跡では、砥石・鉄製品・スラグ・鞴（ふいご）の羽口が出土している。小岱山製鉄群が 9 世紀以降であることを考えるとそれ以前から製鉄が行われたと考えられる。

合志川流域では、上鶴頭遺跡は、9 世紀中葉を中心とする掘立柱建物群である。「コ」の字配置もしくは「ロ」の字の竪もの配置、5 間以上の庇を持つ建物が存在する。遺物は、「西正」「大正」「生」「坂上」等の墨書土器も多数出土しており、官衙関連遺跡と考えられる。旧合志郡にあたり、山本郡ができる時に移された官衙と考えられる。それ以前は、東側 5km 程の南住吉遺跡にあったと考えられている。

南東へ 1.6km 離れた田島廃寺は、法起寺式配置と推定されていて、単弁八弁軒丸瓦偏行唐草文軒瓦で福岡県芦屋町浜口廃寺の瓦と同范品である可能性が指摘されている。9 世紀前半から中葉の創建と考えられる。3.6km の高木原遺跡では、帯飾金具が出土している。3.5 ～ 5km 南東には、千束遺跡、千経塚遺跡等 9 世紀前葉から中葉の集落が営まれている。千経塚遺跡からは、多量の墨書土器が出土している。（「福　」「宅代？」「万」「長原？」「室」）

合志川上流域の伊坂上原遺跡では 8 世紀後半を中心とする竪穴建物や間以上の側柱建物が検出されている。8 世紀中葉以前の建物もありそうである。道路状遺構からは、7 世紀後半の須恵器や金属器模倣杯や 8 世紀中葉以前の土器も量的に出土しており、5 ことや墨書土器「馬　」等も出土していることから、伝路等に関係する施設があった可能性もある。両面庇の 2 間× 3 間の建物がある。

合志川中流域の大久保遺跡では、2 間× 5 間の側柱掘立柱建物が出土しており、9 世紀中葉を主体とするが、8 世紀中葉から後葉の遺物も含まれる。「正」「主」「前」等の墨書土器が含まれる。溝からであるが、鉄滓や布目瓦が出土している。交通路に関係する遺跡と考えられる。

（菊池川流域の古代の集落・官衙関連遺跡・寺跡の分布から）

玉名郡衙は、玉名平野からの低湿地から台地にあがるところの古墳時代の集落より台地にあがったところである。7 世紀後半から 9 世紀にかけて立願寺廃寺ともに営まれた菊池川流域の中心官衙であったと考えられる。鉄や須恵器生産や有明海から入ってくる物資により、繁栄していたと考えられる。

中流域の中村廃寺には製鉄関連遺物があり、周辺の台地にかけて官衙関連遺跡が展開していたと考えられる。また、交通路には、御宇田遺跡群等に見られるように整然とした配

置を持つ官衙関連遺跡も上流にかけて展開していったと考えられる。

7 世紀後半から 8 世紀中葉にかけての様相は集落を含めて不明な点が多いが、8 世紀後半以降の交通路周辺に分布する遺跡の増加は、官衙関連遺跡の整備と連動すると考え、それに伴って上流域の鞠智城の礎石建物群が整備される時期とすれば、地理的に見て、山鹿・菊池・合志を含めた官衙関連遺跡と連動する動きと考えたい。その背景には、鉄・塩・石材・米・特産品の交易・貯蔵等を背景としていた可能性がある。鞠智城周辺にも砂鉄が採集できる区域が近くにあり、石材は周辺から採取できるし、塩は近くの竹の上原遺跡で製塩土器も見つかっており、鞠智城跡からも「古墳時代の製塩土器片も出土していることから伺える。

おわりに

古墳時代の石棺や石屋形や装飾古墳の分布範囲や埴輪の形式の分布等を見ていると菊池川上流域と中流域菊池川上流が中心だが、主な分布範囲の東と南に当たると見てよい。（大宰府や）筑後地域との連携、塩・鉄・凝灰岩や花崗岩等の石材・米等が交易する範囲として、律令政府の勢力が直接及ぶ東・南の境界としてそれより東側の阿蘇地域や日田地域、合志川流域の白川流域及び八代海沿岸地域等南側の抑えとして鞠智城は機能していたと考えられまいか。その背景は古墳時代から見られると考えられる。

また、鞠智城は菊池郡に属していたが、交通路の要衝に墨書土器等が出土する遺跡や 5 間以上の掘立柱建物や庇を持つ建物の存在等を考えると要所要所に主要な古代の遺跡が分布して、ネットワークを組んでいたと考えたい。さらに菊池川流域の古墳の分布や官衙の状況を見ても下流域の玉名郡衙や菊池郡から分岐した合志郡衙、山本郡衙等と連携し、その背後に大和政権が整備した鞠智城が存在する状況と考えたい。

白村江の戦い以前に、九州中部以南を視野に筑紫（那津）官家ないし大宰府の出先として交通・交易のルート上の要衝であり、古墳時代以来の交易・文化交流地点の東・南の端である地域の首長の背後の高所の地点に大和政権直轄の施設として備えた官衙施設として鞠智城が築城されたとは考えられまいか。菊鹿盆地を見渡せ、菊池川水系の水運を利用できる場所を押さえたと考えられる。途中に、古代山城の機能を加えて、官衙機能は 9 世紀中葉まででは、機能し、菊池郡倉としては、さらに継続されたと考えられる。

（主要参考文献）

九州前方後円墳研究会「九州における首長墓系譜の再検討」2010
九州前方後円墳研究会「集落と古墳の動態Ⅰ」2018
九州前方後円墳研究会「九州の埴輪その変遷と地域性」2000
九州前方後円墳研究会「九州の横穴墓と地下式横穴」2001
国立歴史民俗博物館「国立歴史民俗博物館研究報告 173」2012
熊本古墳研究会「熊本古墳研究第３号」2010
松本　雅明「肥後の国府と古代寺院趾の研究」弘生書林　1987
山鹿市　「山鹿市史」1985　　西合志市「西合志町史 資料編」 西合志町史　通史編」1995　西合志町菊鹿町「鹿本町史」鹿本町鹿央町「鹿央町史」鹿央町
山口　健剛「「６世紀前半の大量の埴輪 - 中村双子塚古墳」『季刊考古学第 84 号』雄山閣　2003
玉名市　「玉名郡衙」 玉名市歴史資料修正第十二集　1994
古代学協会「古代文化第 46 巻第５号」1994
高田　貫太「古墳時代の日朝関係」2014
「先人の暮らしと世界観」熊本歴史叢書２　古代下　熊本日日新聞社　2003
岩戸山歴史資料館　「石人・石馬」1994「藤巻遺跡　第１次・第２次調査　」菊池市教育委員会　2009

＊各遺跡の概要については、それぞれの教育委員会の報告書による。割愛させていただいた。

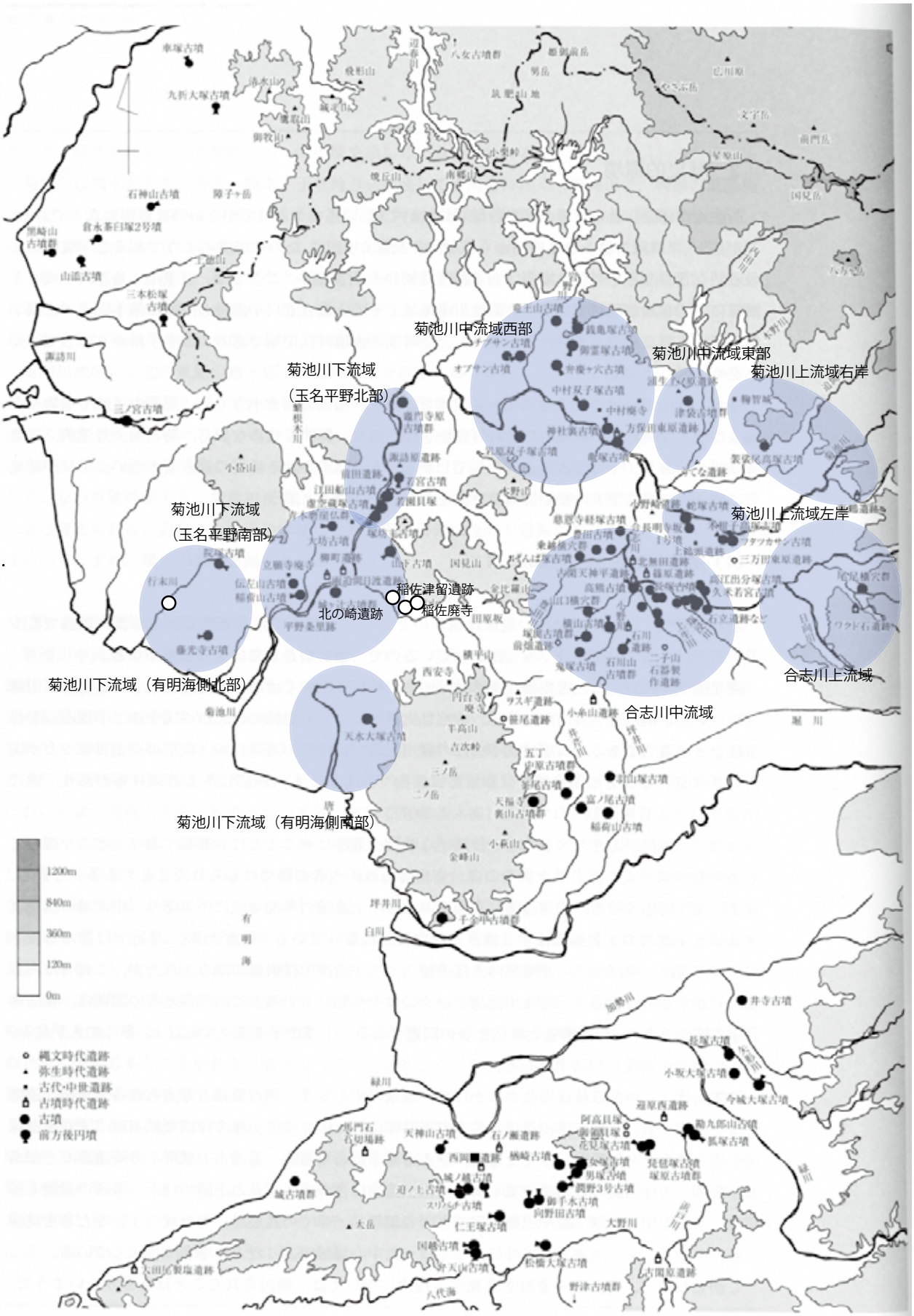


図１　菊池川流域を中心とした遺跡分布図

（国立歴史民俗博物館研究報告第 173 集第 23 図　2012 を改変）

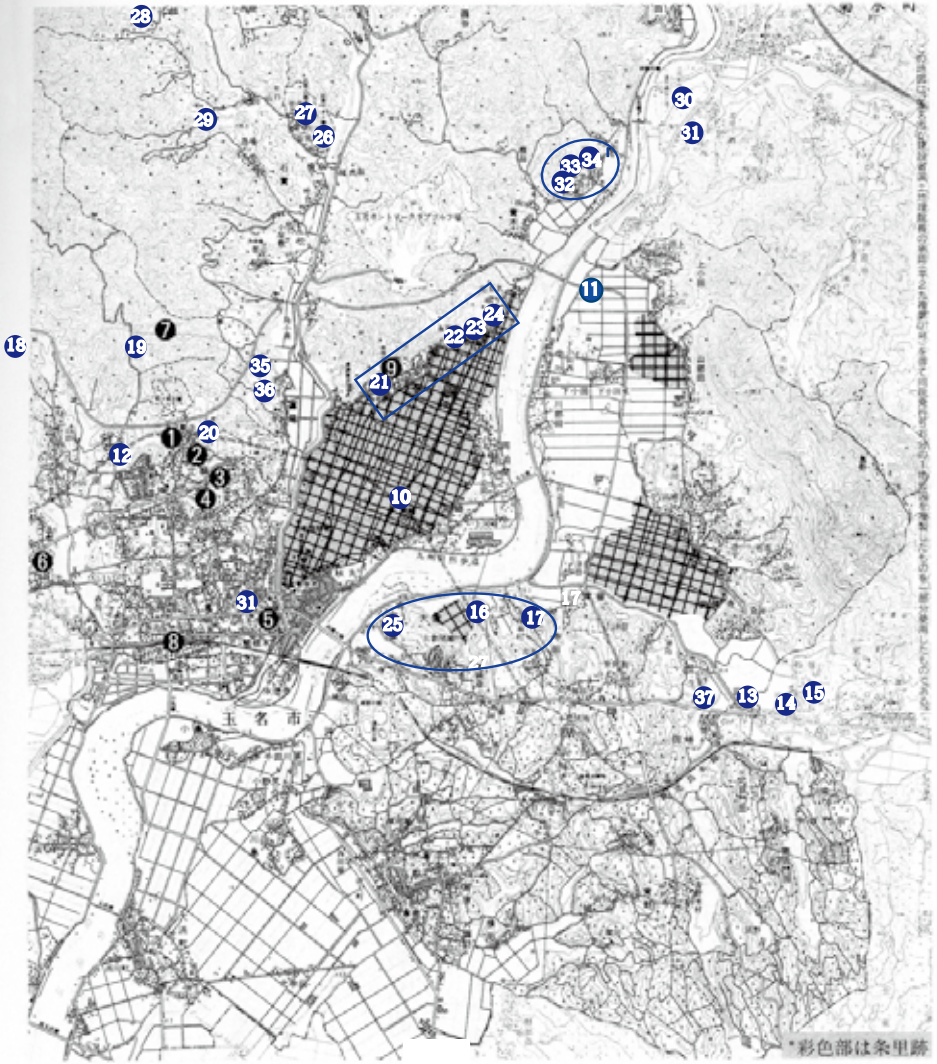


図2　玉名条里図（玉名市 2005 第 9 図改変）

1　玉名郡家　2　玉名郡寺　3　玉名郡倉　4　疋野神社　5　稲荷山古墳墳項部（立願寺瓦出土地）
6　蓮華遺跡（立願寺瓦出土地）　7　磐座（金毘羅山）　8　大　湊　9　日置氏の最初の拠点
10　柳町・両迫間日渡遺跡・玉名平野条里跡　11 上小田宮の前遺跡　12 山田松尾平遺跡
13 北の崎遺跡　14 稲佐津留遺跡　15 稲佐廃寺　16 城ケ辻古墳群　17　寺田古墳群　18 保田地窯跡群
19 蛇ケ谷製鉄跡　20 立願寺大塚遺跡　21 大坊古墳　22 永安寺東・西古墳　23 馬出古墳　24 小路古墳
25 松林寺山古墳　26 石貫ナギノ横穴群　27 石貫穴観音横穴群　28 三ツ川六反製鉄跡　29 広福寺裏製鉄跡
30 清原古墳群（江田船山・京塚・虚空蔵塚・塚坊主古墳）31 姫塚古墳　32 前田古墳 33 宮の後古墳 34 真福寺東古墳
35 富尾原横穴群 A　36 富尾浦谷横穴群　37 田崎横穴群

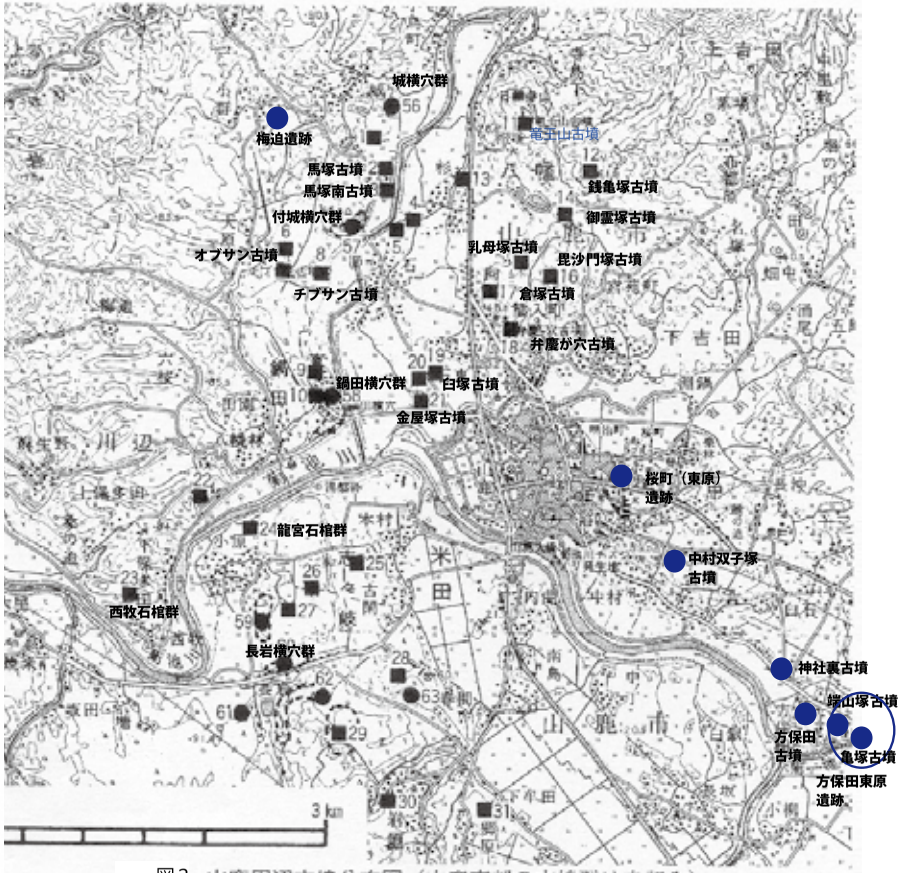


図3　山鹿周辺古墳分布図（山鹿東部の古墳群は未記入）
■古墳　●横穴

（玉名市　2005）

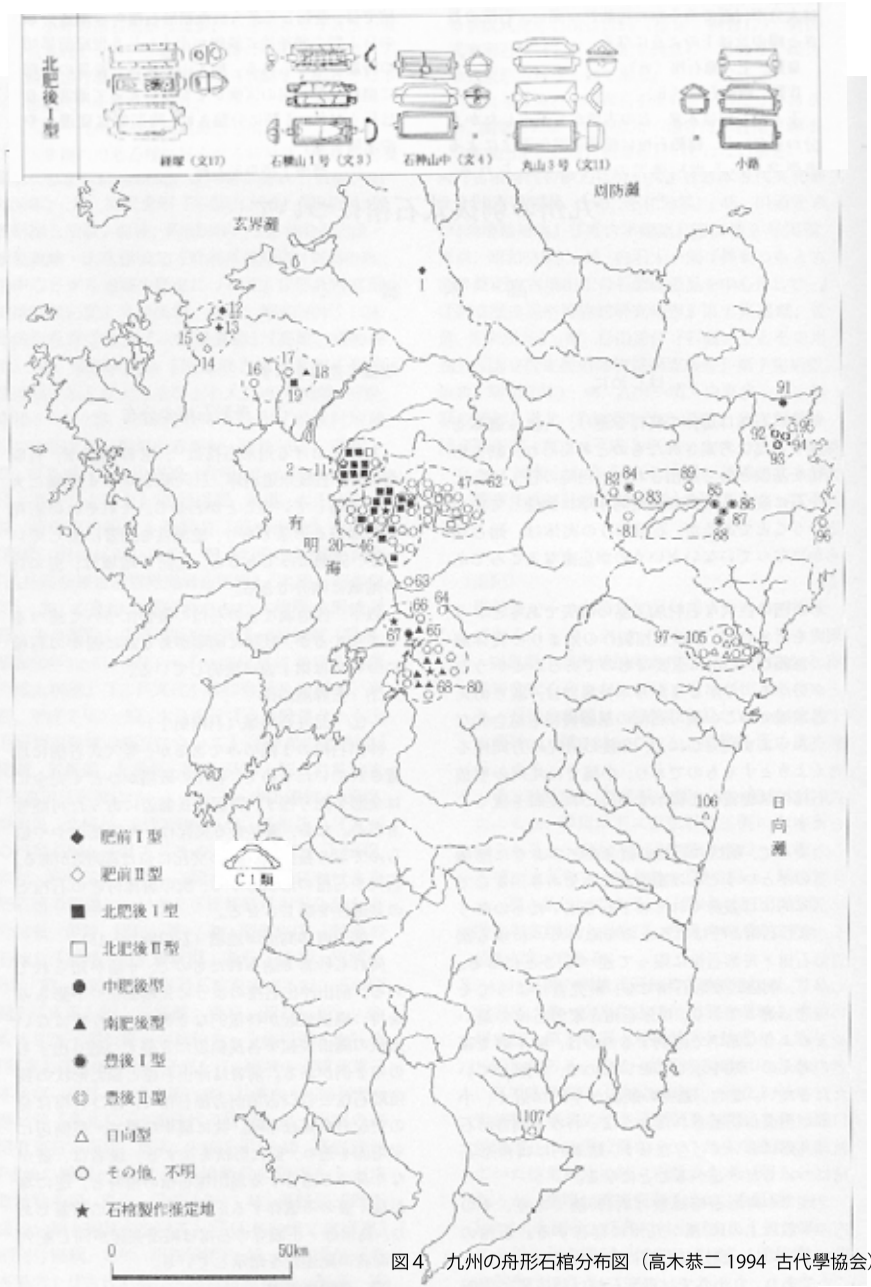
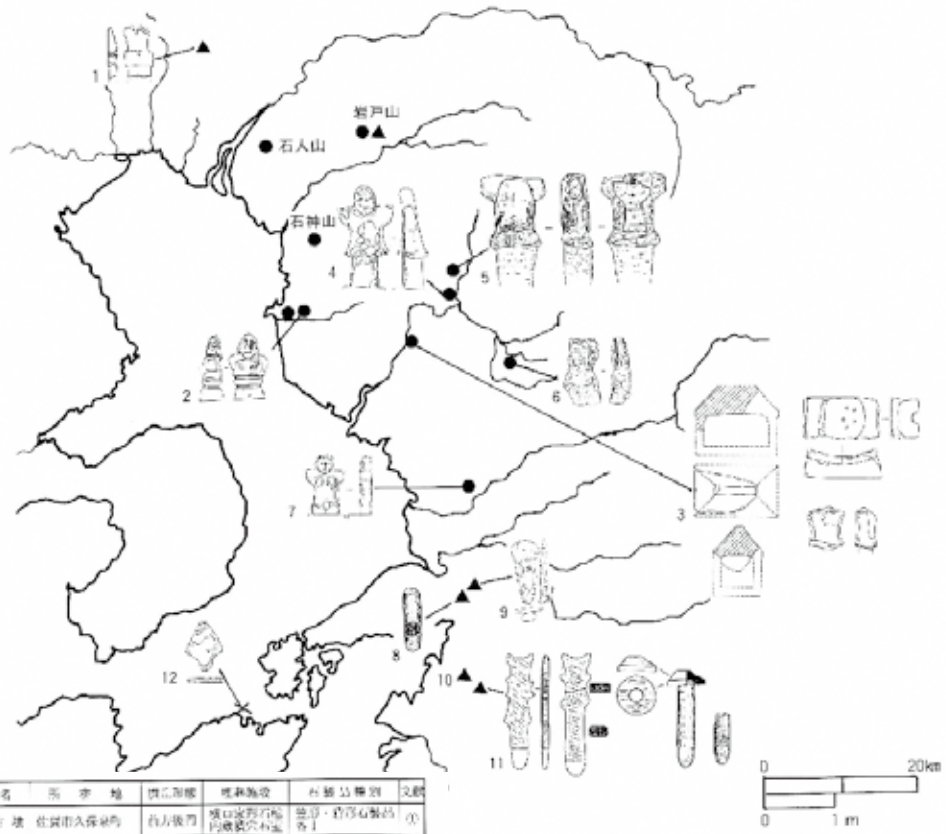


図4　九州の舟形石棺分布図（高木恭二 1994 古代學協会）

図5　肥後　主要な石屋形を有する古墳分布図
（宇野　慎敏　2010）



№	古墳名	所在地	墳丘形態	埋葬施設	石製品種別	文献
1	西原古墳	佐賀市久保泉町	前方後円	横口式石室 円墳横穴石室	盾形・蓋形石製品 各1	①
2	二の宮古墳	筑紫野市戸切	前方後円	不明	武装石人1	②
3	浦原古墳群	久留米市水町浦原	不明	不明	短甲・被帽・冠・大刀形石製品 各1	③
4	オブセン古墳	山鹿市鹿	前方後円	横穴式石室	石人1	④
5	仁頼古墳	山鹿市石	円	横穴式石室	石製短甲1	⑤
6	ヲダツルサン古墳	熊本市大字[illegible]	前方後円	不明	武装石人1	⑥
7	宮ノ尾古墳群	熊本市北区[illegible]	不明	不明	石人1	⑦
8	ヤノ窓古墳	宇佐郡[illegible]町	円	組合式横穴式石室	盾形石製品[illegible]1	⑧
9	北原1号墳	宇佐郡[illegible]町	円	組合式横穴式石室	盾形石製品1	⑨
10	天神山古墳	八代郡竜北町大字[illegible]	円？	不明	盾形石製品1	⑩
11	郡ノ城二号墳	八代郡竜北町大野	前方後円	不明	盾形石製品・石人 各1	⑪
12	竹島3号墳	天草郡[illegible]町	円	横穴式石室	武装形石製品1	⑫
A	小野町	熊本市北区[illegible]町	不明	不明	盾形石製品？	⑬
B	高塚古墳	熊本市[illegible]区	円	横穴式石室	盾形石製品？1	⑭
C	今城大塚古墳	下益城郡[illegible]町	前方後円	横穴式石室	盾形石製品？1	⑮

図６　肥前肥後の石製品分布図
（高木恭二　1994　岩戸山歴史資料館）

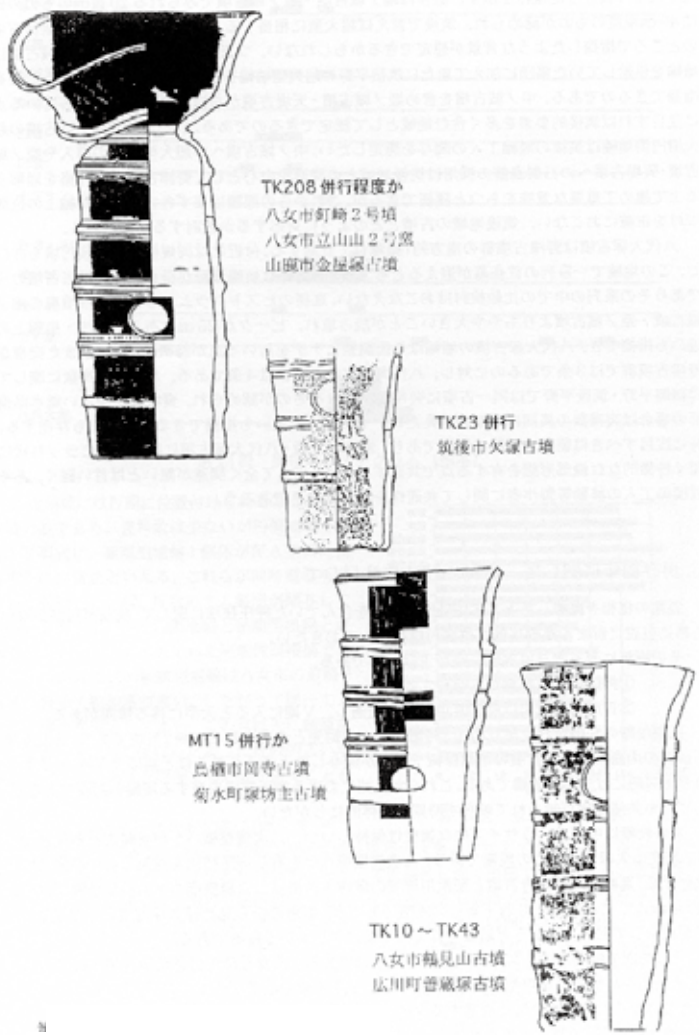
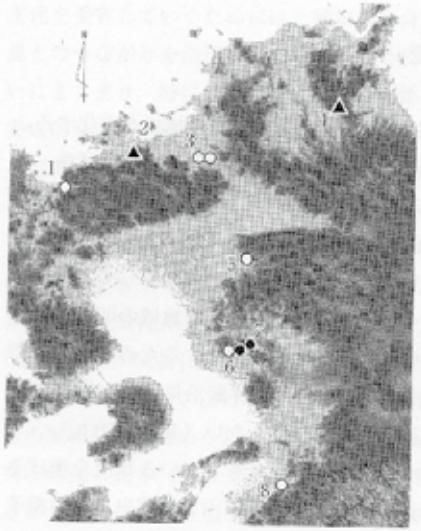


図７　押圧技法を有する円筒埴輪の編年
（岸本圭　2000　九州前方墳研究会）



第71図　中・北部九州地域における垂飾付耳飾の分布（統合Ⅱ期）
1：半田・宮の上古墳　2：陣内古墳　3：日拝塚古墳　4：長畑1号墳　5：立山山8号墳　6：大坊古墳　7：江田船山古墳（追葬段階）　8：物見櫓古墳
○：大加耶系　●：百済系　▲：新羅系
（高田　貫太　2014）

図９　中・北部九州地域における垂飾付耳飾の分布（６世紀前半）

図 10 南海産貝製品出土分布図（木下　尚子　2003）

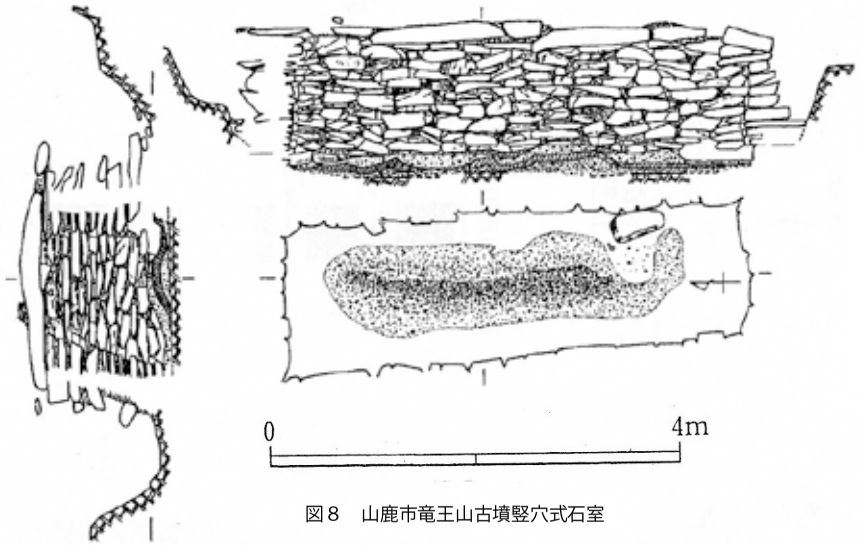


図８　山鹿市竜王山古墳竪穴式石室

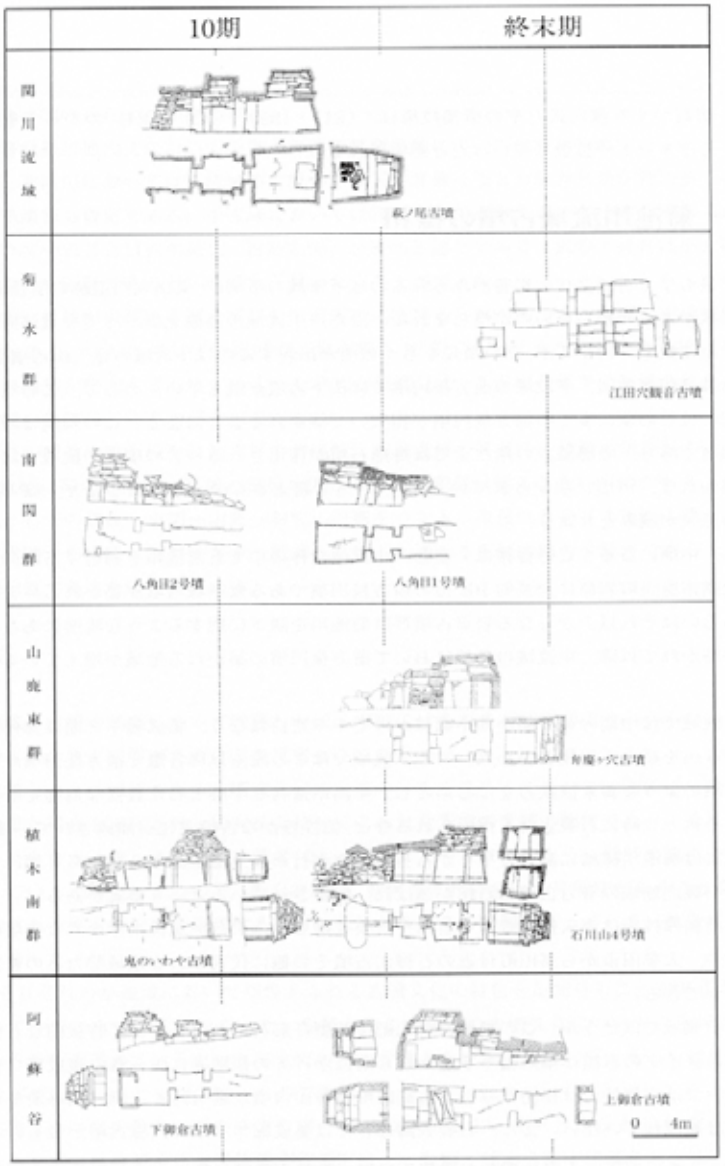


図 11　　切石造複室横穴式石室変遷図 (高木　恭二 2012)

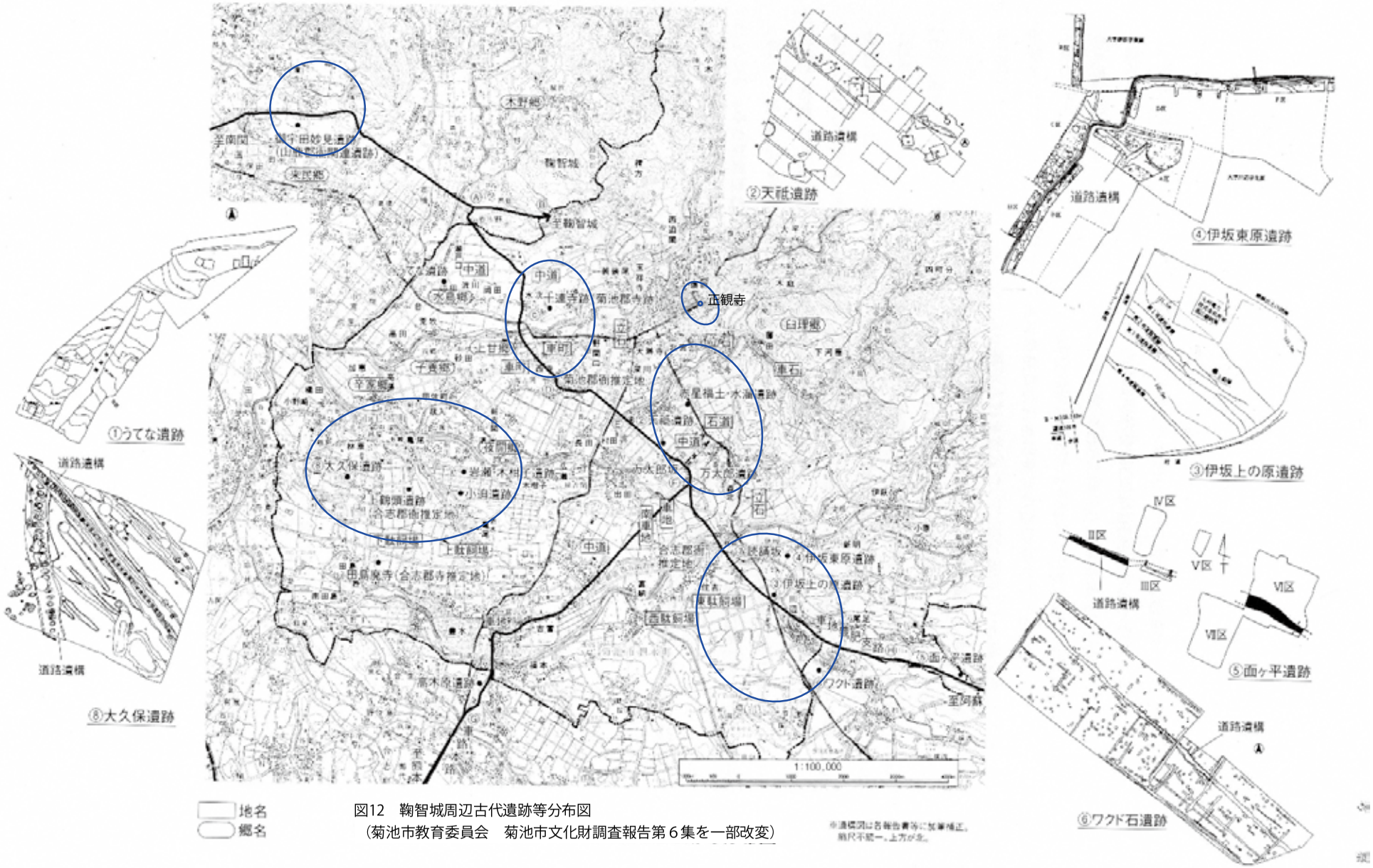
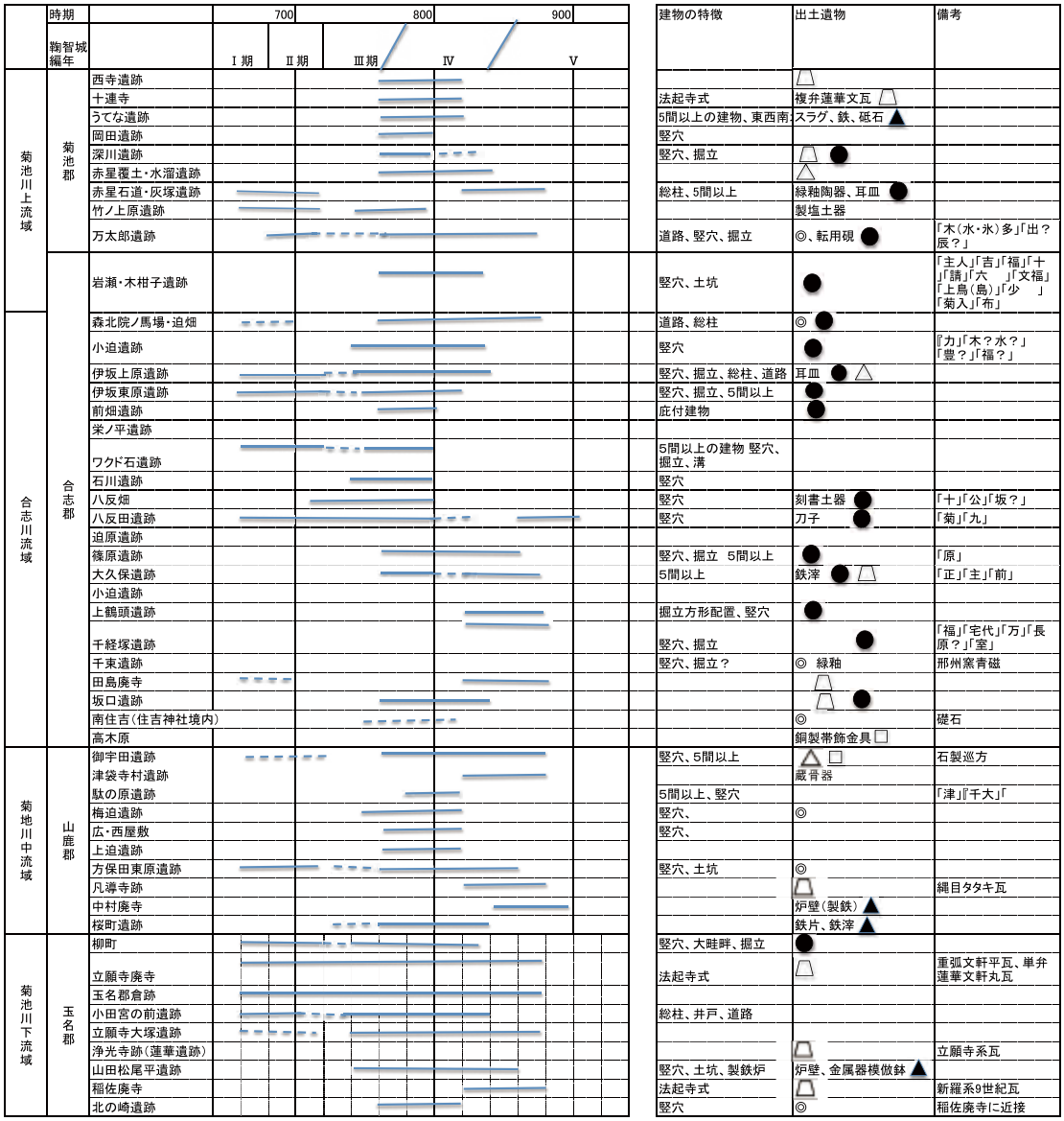


図12　鞠智城周辺古代遺跡等分布図
（菊池市教育委員会　菊池市文化財調査報告第６集を一部改変）

表１　菊池川流域古墳時代集落消長表



＊注　略称対照　　法起寺式 →　法起寺式伽藍配置　　竪穴 →　竪穴建物　　掘立→　掘立柱建物

墨書土器　●　越州窯青磁　△　円面硯　◎　製塩土器　瓦　銙帯（帯金具）□　鉄関連 ▲

表２　菊池川流域古代集落消長表

(MEMO)

鞠智城跡宮野礎石群 (南から）

鞠智城跡出土銅造菩薩立像

この電子書籍は、地域社会からさぐる古代山城・鞠智城 鞠智城シンポジウム発表要旨 2020 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：地域社会からさぐる古代山城・鞠智城
鞠智城座談会
鞠智城シンポジウム発表要旨 2020
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 21 日